
Arc-en-ciel ~ なないろのきざはし ~ (黄牙&唯鈴ルート)

CENTER

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Arc-en-ciel（なないろのきざし）（黄牙&唯鈴ルト）

【Nコード】

N4579N

【作者名】

CENTER

【あらすじ】

学園の二年生である城崎陽は、友人たちとごく普通の日常を送っていた。

ある日、陽は取り壊し間近の神社で一人の少女と出会う。少女は言った。「虹を架けてみないかな？」と。

それから二週間。虹は天にかかり、本当の物語が始まる。

虹色の願いと小さな小さな奇跡が紡ぐ物語。

コンセプトは小説でギャルゲ。

個人ルート2人目です。

六月十五日（前書き）

この作品は、Arc-en-ciel（なないろのきざし）（共通ルート）の続きです。

読んでいない方は、先にそちらをご覧ください。

六月十五日

Arc-en-ciel^{アルカンシェル} なのいろのきざはし
大陣黄牙&唯鈴編

< 6月14日(日) >

< 神社 裏 >

強烈な煌きを最後に、光は唐突に収まった。

【那美】

「陽君、大丈夫だったかな？」

あんなに非常識な状況を起こした張本人のくせに、しれっとそんな事を言ってくる。

いや、張本人だからこそか。

【陽】

「あ、ああ。驚いただけ——って、那美!？」

【那美】

「どうかした？」

【陽】

「どうかって、お前、その髪……」

【那美】

「髪？」

那美は、自分の髪を一房取って眼前にかざす。

【那美】

「あ、薄くなってる」

【陽】

「『あ』ですむ事態じゃないだろ！」

黒かった髪が、全部灰色になってるんだぞ！？

【那美】

「そんなに心配しないで。力を使って……私を分けてしまったから薄くなっただけだから」

【陽】

「力？ それって、さっきのアレか？ って言うか、何だったんだよ、あれは！？」

夜なのに虹が出来てたり、光ったり、薄くなったり、訳がわからない。

【陽】

「ちゃんと説明してくれ！」

【那美】

「……ごめんね。今は、話せないの」

【陽】

「話せないって……それは無いだろ」

これだけ不思議な事を見せられて、はいわかりましたって引き下
がれるか。

【那美】

「……ごめんなさい。でも、これは陽君達に悪い事じゃないの」

那美が肩を落として目を伏せる。

【那美】

「それしか言えないけど、それは本当だから……」

【陽】

「——はあ」

そんなに悲しそうな顔されたら、聞いているこっちが悪者みたいじ
やないか。

【陽】

「わかった。お前の言ってる事、信じるよ」

【那美】

「陽君」

【陽】

「『今は』って事は、そのうち話してくれるんだろ？」

【那美】

「うん。いつか、必ず話すよ」

【陽】

「ん、そうしてくれ。それじゃ、帰るよ」

もう門限ぎりぎりだ……早く帰らないとやばい事になる。

【那美】

「あ、ちょっと待って」

【陽】

「どうした？」

【那美】

「うん。あれを見て」

【陽】

「ん？」

空を見上げる。

もう何があっても驚かないから――

【陽】

「って、何だあれ！？」

空には、虹の黄色の部分だけが残って浮かんでいる。

どうやったら虹が1色残るんだよ……

【那美】

「ちよっと、待っててね」

那美が両手を掲げる。

さっきと同じように光が那美と虹を包む。

【陽】

「これは……」

虹が光の中に溶け出す。

そして、その光は、那美の手の中に集まって行った。

【那美】

「うん、これでいいかな」

光を包み込んだ手を開くと、そこにはビー玉大の黄色い珠が載っていた。

【那美】

「陽君。これを持って行って」

【陽】

「何なんだ？」

【那美】

「これはね——」

< 6月15日(月) >
< 学生寮 213号室 >

【陽】

「『奇跡だよ』——か」

机の上には那美からもらった『奇跡』の珠があつた。

これが無かつたら昨日の不思議体験は全部夢で片付けられたのに

……

こうして証拠が残ってるんじゃ、受け入れるしかないか。

【陽】

「心から祈れば小さな奇跡を起こせるって言われてもなあ……」

あれだけ現実離れた光景を見せ付けられたんだ。

その効果の真偽について疑いはしないけど。

でも、どのくらいまでが『小さな奇跡』なんだ？

お金が欲しいと祈ったとして、100万円は無理で10万なら貰えるとか、そんな感じか？

どうせなら、その所の基準をはっきりしてもらいたかったな。

【陽】

「ま、いいか」

心から祈るほど切実なお願いは、今の所無い訳だし。

俺は、珠を制服の内ポケットに突っ込んで部屋を出た。

<学生寮 食堂>

いつものように黄牙を叩き起こして、食堂へ向かう。

【黄牙】

「うお、混んでんなあ……」

【陽】

「どっか空いてるか？」

周囲を見回す。

【橙歌】

「陽、黄牙！ こっちー！」

橙歌がぶんぶんと手を振っていた。

その周りには、アルカンシエルメンバーが集まっている。

【黄牙】

「何だ、結局集まってんのか」

【陽】

「みたいだな」

俺達も、同じテーブルにつく。

【陽】

「アルカンシエルが解散しても、こうやって集まるのは変わらないな」

【黄牙】

「だな。本当の仲間ってのは、こんなもんなんだろうよ」

そう言う黄牙は、何か眩しい物を見るような顔をしていた。

【陽】

「ん、そうだな」

仲間か。

アルカンシエルって枠があるからじゃなくて、ただ仲間だから集まってくる。

そういう関係を気づく事ができた事。

それが、何となく嬉しかった。

<学園 2年教室>

今日も1日の授業が終わり、放課後になった。

【黄牙】

「陽、どっか遊びに行かねえか？」

帰り支度をしていると、鞆を持った黄牙が声をかけて来た。

【陽】

「悪い。ちょっと用があるんだ」

【黄牙】

「あー、そうか」

【陽】

「そついう訳で、また今度な」

【黄牙】

「おう。んじゃーな」

黄牙を見送ってから、携帯を取り出す。

新着メールは無い。

【陽】

「でもま、一応な」

俺は携帯をポケットに戻し、鞆を担いで教室を後にした。

< 神社 裏 >

【陽】

「やっぱ、何もないか……」

俺は、昨日の夜、超常現象に巻き込まれた場所を訪れていた。

頭上にはごく普通の青空が広がっていて、虹の姿など欠片も無い。

那美がいる事を少し期待していたが、その姿も見当たらなかった。

こうしていると、ますます昨日のアレが夢だったんじゃないかと思えてしまう。

【陽】

「でも、あれは現実だよな」

ポケットから、黄色い珠を取り出す。

太陽の光にかざすと、黄色い光が目に入った。

見た目はただのビー玉と大して変わり無い。

それでも、これだけがあの出来事を現実と証明する物だった。

【陽】

「はぁ……帰るか」

那美がいないのなら、これ以上いても仕方が無い。

どうもすっかりしないけど、もう帰ろう。

帰ってから黄牙を誘い出して遊びに行こうかなあ。

<神社 境内>

境内に戻ると、なぜかそこに黄牙がいた。

【陽】

「黄牙？」

黄牙も、俺を見つけて驚いた顔になる。

【黄牙】

「陽じゃねえか。何やってんだよ、こんな所で」

【陽】

「それはお互い様だと思うけど」

むしろ、黄牙の方がここに来る理由が無いような気がする。

【陽】

「俺はちょっと那美に聞きたい事があったんだ。……会えなかったけど」

【陽】

「お前は？」

【黄牙】

「暇だったからだ」

【黄牙】

「お前はあるって言うしよ。ぶらぶらしてたら、ついここに来ちまってた」

【黄牙】

「誰か来てんじゃねえかと思ってよ」

【陽】

「そうだったのか」

この場所。

確かに、今ではアルカンシエルの集合場所だけど……

俺達以外だって集合場所に使ってないわけじゃない。

【陽】

「誰かってのは、アルカンシエルのメンバーだよな？」

【黄牙】

「あ？ 当たり前だろ。何言ってるんだ？」

【陽】

「いや、別に」

考えすぎだったか。

【陽】

「変な事言っただけだったな」

【黄牙】

「いいけどよ。で、お前の用は済んだのか？」

【陽】

「ああ」

【黄牙】

「なら、どこかで遊んでこいぜ」

【陽】

「ん、そうだな。商店街にでも行くか」

【黄牙】

「おう」

黄牙が頷く。

俺たちは商店街に向かって、石段を下り始めた。

< 学生寮 213号室 >

夕食の後、俺は部屋で宿題をしていた。

【陽】

「ん？」

携帯に着信がある。

メールだ。

From: 大陣 唯鈴

Subject: お料理

こんばんは、お兄さん。

前に、料理の練習をするって言ったのを覚えていますか？

最近、お母さんにも上手になったって言われるようになりました。

お兄さん、私の料理を食べてくれますか？

そう言えば、そんな事言ってたな。

黄牙に料理もできない子供って言われたのが嫌だったんだっけ。

返事をおこそう。

『もちろん。喜んで』と。

.....

From: 大陣 唯鈴

Subject: Re: Re: お料理

ありがとう、お兄さん。

じゃあ、明日お弁当を作ります。
朝、寮の前で待っていて下さい。

それでは、お休みなさい。

明日？

割とせつかちだな。

まあ、いいか。

『楽しみにしておくよ。お休み』と。

それにしても、何で唯鈴ちゃん、メールだと敬語になるんだろう？

六月十六日

アルカンシェル

Arc-en-ciel）なないろのきざはし

大陣黄牙&唯鈴編

<6月16日(火)>

<学生寮 213号室>

【??】

「おい、起きろよ」

【陽】

「ん……」

目を開く。

【黄牙】

「やっと起きたか」

【陽】

「黄牙……?」

なぜか、部屋の中に黄牙がいた。

ちゃんと制服を着て、学園に行く準備をしている。

【陽】

「って、え、マジで!?!」

黄牙に起こされるとは。

寝過ごしたか？

ベッドから飛び起きる。

慌てて時計を見ると、

【陽】

「6時半?」

いつも起きる時間より1時間は早い。

【陽】

「これは、時計が遅れてるとかそついうオチか?」

【黄牙】

「いや、その時間であつてるぜ」

【陽】

「……何でこんな時間に起こされたんだよ、俺は」

【黄牙】

「何だ、お前は聞いてねえのか?」

【陽】

「何を？」

【黄牙】

「唯鈴が来るって言ってたじゃねえか！」

【陽】

「ああ……」

納得した。

唯鈴ちゃん、黄牙にも連絡入れてたのか。

【陽】

「それにしたって、早すぎるだろ」

【黄牙】

「何言ってるんだ。唯鈴を待たせるつもりか？」

待たせるのが良くないってのはわかるけど、

こんなに早く起きたって、俺達が盛大に待つだけなんだが。

普段は放っておくと遅刻するまで寝てるくせに。

【陽】

「極端なんだよ。このシスコンが」

【黄牙】

「シスコンじゃねえよ、妹思いなんだ！」

【陽】

「はいはい」

<学生寮 玄関>

結局、黄牙に引っ張り出されてしまった。

寮を出て、そろそろ1時間近い。

いつもの登校時間と、あんまり変わらない時間になりつつあった。

【陽】

「なあ、黄牙」

【黄牙】

「ああ？」

【陽】

「やっぱり、もうちょっとゆっくりしてて良かったんじゃないか？」

【黄牙】

「んだと！？ 唯鈴を待たせていいってのかよ！」

【陽】

「そんな事言ってないだろ」

【陽】

「てか、喧嘩売ってるんじゃないんだから、一々凄むな」

【黄牙】

「悪い。ついな」

【黄牙】

「ま、お前が喧嘩売ってきても、返り討ちだけだよ」

【陽】

「わかってるって。だいたい、俺が喧嘩売るはずないだろ」

【黄牙】

「ま、そうだな」

そんな話をしていると、唯鈴ちゃんの姿が見えた。

嶺明学園の特徴的な制服の中で、1人だけ中学校の制服だから、妙に目だって見える。

【唯鈴】

「お兄ちゃん。お兄さん」

俺達を見つけて、手を振る。

【黄牙】

「やっと来たか」

【陽】

「いつもの時間に出たらぴったりだったな」

【黄牙】

「うるせえ」

唯鈴ちゃんが俺達の前に到着する。

【唯鈴】

「ごめんね、遅くなって」

【陽】

「ああ、黄牙のせいで1時間」

【黄牙】

「陽」

睨まれた。

【陽】

「いや、俺達も今来た所だよ。ははは……」

【唯鈴】

「そっなの？ よかったあ」

【陽】

「と言うか、わざわざごめんな。ここまで持って来てもらって」

【唯鈴】

「そんな事無いよ。私が食べてもらっただし」

【唯鈴】

「あ、お弁当渡さない」と

そう言って、手提げ袋をぐそぐそと探す。

そして、布に包まれた2つの包みを取り出す。

【唯鈴】

「えっと、こっちがお兄さん」

青い無地の包みを渡される。

【陽】

「ん、ありがとう」

【唯鈴】

「はい、こっちはお兄ちゃんの」

可愛いウサギがプリントされた包みを差し出す。

【黄牙】

「お、おう」

複雑な顔で受け取る黄牙。

黄牙の手に可愛いウサギ。

【陽】

「くくっ」

似合わないにも程がある。

【黄牙】

「陽、てめえ……」

【陽】

「いや、だって、くくっ」

睨まれても、面白いのは面白い。

むしろ、凄まじるとギャップがいつそう面白さを増す。

【橙歌】

「2人とも、何やってんのさ」

【赤明】

「あら、唯鈴ちゃん？」

橙歌と赤明が寮から出てきた。

【唯鈴】

「あ、橙歌お姉さん、赤明お姉さん。おはよう」

唯鈴ちゃんが挨拶する。

ちなみに、この2人と唯鈴ちゃんは面識がある。

【赤明】

「ええ、おはよう。どうしたの？」

【唯鈴】

「お兄ちゃん達にお弁当を持ってきたんだよ」

【橙歌】

「ふーん。って、黄牙、何それ。あははははっ」

黄牙の手の包みを見て、橙歌が笑い出す。

【赤明】

「か、可愛いわね……ふふっ」

赤明も笑いを噛み殺しきれてない。

【黄牙】

「あーっ、もう、俺は先に行くからな！」

耐えられなくなっただらしい。

黄牙はさっさと学校に向かって行ってしまった。

【橙歌】

「あ、待ちなよー」

【赤明】

「ちよっと橙歌！」

【赤明】

「私も行くわね。また会いましょう、唯鈴ちゃん」

橙歌と赤明がその後が続いて行った。

【陽】

「それじゃ、俺も行くよ」

【唯鈴】

「うん。あ、お兄さん」

【陽】

「ん？」

【唯鈴】

「できれば、お兄ちゃんと一緒に弁当食べないで欲しいな」

【陽】

「何で？」

【唯鈴】

「それは秘密」

【唯鈴】

「あ、私も行かないと遅刻だ」

【陽】

「ん、じゃあ行かないと。気をつけろよ」

【唯鈴】

「うんっ。じゃ、またねー」

唯鈴ちゃんが手を振って走って行く。

俺も学園に行くか。

<学園 2年教室>

昼休みになった。

【黄牙】

「つしゃあ！ 飯だ！」

待ちかねたとばかりに黄牙が声を上げる。

授業中もいつも以上に身が入っていないのがバレバレだった。

唯鈴ちゃんの手作り弁当がよっぽど楽しみだったらしい。

【黄牙】

「陽、飯食おうぜ」

黄牙が、包みを片手にやって来る。

【陽】

「ん、そうだな。どこで食う？」

【黄牙】

「教室でいいだろ」

【陽】

「わかった」

俺が頷くと、黄牙は近くの席から椅子を引っ張って来て、俺の前に座った。

【陽】
「あ」

そう言えば、唯鈴ちゃんに黄牙とは食べないで欲しいって言われてたな。

【黄牙】
「どうした？」

ま、いいか。

【陽】
「いや、何でもない。じゃ、食べるか」

包みを解き、蓋を開ける。

メインはハンバーグ。

それに、付け合せのにんじんとポテトや卵焼き。

ご飯は小ぶりの俵型のお握りが詰めてあった。

【陽】
「へえ」

思わず声が漏れた。

今回は、味見と言うか毒見の様なものだと思ってたけど、

想像以上にきちんとしている。

【陽】

「美味しそうだな。な、黄牙」

【黄牙】

「……そうだな」

妙に歯切れの悪い返事だな。

黄牙の弁当箱をしてみる。

【陽】

「あれ？」

メニューは俺のと同じ。

同じなのだが、おかずに黒く焦げた部分が目立つ。

おにぎりも、微妙に形が崩れていたり、巻いてある海苔が破れた
りしている。

……唯鈴ちゃん、上手くできた分を俺の弁当箱に入れたのか。

それは、一緒に食べないでって言うわけだな。

【黄牙】

「お前、それ……」

【陽】

「げ」

黄牙が俺の弁当を見ていた。

気づかれたらしい。

【黄牙】

「そっちの方が美味そうじゃねえか！」

【陽】

「あー、気のせいじゃないか？」

【陽】

「ほら、隣の芝は青いつて言うだろ？」

【黄牙】

「なるほど……って、んなわけねえだろ！」

【陽】

「だよなあ」

さすがにごまかせないか。

【黄牙】

「よこせ！」

黄牙が箸を伸ばしてくる。

【陽】

「おっと」

弁当箱を動かして躲す。

【黄牙】

「……………」

【陽】

「……………」

机を挟んで睨み合う。

【黄牙】

「くれ！」

バツと手を伸ばす。

【陽】

「ダメだ」

サツと躲す。

【黄牙】

「くれよ」

バツ！

【陽】

「嫌だ」

サツ。

【黄牙】

「下さい！」

下手に出た！

【陽】

「断る！」

容赦なく断った。

【黄牙】

「だったら力ずくでも！」

【陽】

「ちょ、ま、こら」

.....

.....

.....

【黄牙】

「はあ、はあ、やるじゃねえか.....」

【陽】

「あ、甘く見るなよ.....」

激しい攻防の末、俺はまだ何とか弁当を死守していた。

だが、このままだと奪われるのは時間の問題だ。

【陽】

「オーケー、ここは妥協しよう」

【陽】

「おかずをそれぞれ一個ずつ交換。これでどうだ？」

【黄牙】

「乗った！」

【陽】

「よし」

おかずを1つずつ交換する。

全く。無駄に体力と時間を使ってしまった……

【陽】

「じゃ、食べるか」

【黄牙】

「そうだな」

【陽】

「いただきます」

何を食べようかな。

最初は、ハンバーグにするか。

【陽】

「もぐもぐ」

【陽】

「うん、普通に美味しい」

絶賛するほど美味しいとは言えないが、普通に美味しいと思える味だ。

始めたのが2週間くらい前なんだから、大したものだ。

【陽】

「やるなあ唯鈴ちゃん。な、黄牙」

【黄牙】

「……………」

ぶるぶると震えていた。

【陽】

「黄牙？」

【黄牙】

「うーまーいーぞー！」

【陽】

「……………」

こいつの場合、失敗作でも関係ないんじゃないだろうか。

【唯鈴】

『ごめんね、お兄ちゃん。ちょっと失敗しちゃった』

【黄牙】

『何言ってるんだ。お前の料理なら何だって美味しいぜ』

【唯鈴】

『お兄ちゃん……嬉しいっ』

こんな光景が目には浮かぶ。

【黄牙】

「さすが唯鈴。最高だ！」

【陽】

「やれやれ……ん、これも美味しいな」

大げさに喜ぶ黄牙を尻目に、黙々と弁当を食べるのだった。

< 学生寮 213号室 >

授業が終わり、寮の自分の部屋に帰って来た。

もう神社に行く必要はないし、何をしよう。

アルカンシエルと言うグループで放課後集まっていたのは、ほんの2週間くらいなのに、

それが無くなっただけでやる事が無くなったような気がする。

それだけ、濃い日々だったって事か。

【陽】

「あ、そうだ」

弁当箱どうしよう。

洗った方がいいかな。

でも、部屋にキッチンは無いんだよな。

風呂をつけたんならキッチンもつければいいのに。

いや、これは贅沢言い過ぎか。

とりあえず洗面台で洗おう。

< 学生寮 214号室 >

【陽】

「黄牙、いるだろ？」

水洗いだけした弁当箱を片手に黄牙の部屋を訪ねる。

【黄牙】

「陽か？ 入れよ」

【陽】

「ああ」

扉を開いて黄牙の部屋に入る。

寮の部屋はオートロックだが、それが機能するのはカードを抜いている時だけだ。

室内にいる時は手で鍵をかける必要がある。

だから、部屋にいる時は鍵をかけてない奴は割りという。

俺や黄牙もそっち派だ。

ま、寝る時まで開けっ放しなのはどうかと思うけど。

【黄牙】

「どうした？」

【陽】

「ん、弁当箱をどうするかと思って。唯鈴ちゃんに返さないといけないだろ？」

【黄牙】

「……そっぴやそっぴな」

今気づいたと言わんばかりの態度だ。

【陽】

「……弁当箱はどうした？」

【黄牙】

「あー、その辺にねえか？」

床を見る。

無造作に積まれた雑誌や放り出された鞆に混ざって、弁当箱の包みが転がっていた。

意識してみると、相当散らかつてる。

【陽】

「なあ、掃除しないか？」

【黄牙】

「面倒だ」

【陽】

「だと思ったよ」

俺も、わざわざ人の部屋を掃除する程の綺麗好きでもない。

耐えられなくなったら掃除するのは知ってるし、放っておこう。

【陽】

「で、弁当箱はどうする？」

弁当箱を床から拾い上げる。

【黄牙】

「そうだなあ。ちょっと待ってる。聞いてみる」

黄牙は携帯を取り出し、どこかに電話をかける。

多分、唯鈴ちゃんだろう。

【黄牙】

「唯鈴、俺だ。弁当？ 美味かったよ」

【黄牙】

「弁当箱はどうすりゃいいんだ？

ああ？ 珍しい？

悪かったな、陽に言われたんだよ」

【黄牙】

「何、陽の感想？

んなもん自分で聞け」

【黄牙】

「お、そうだ」

【黄牙】

「今帰りだろ？

陽に弁当箱もって行かせてやる」

【黄牙】

「商店街の入り口で待ってる。
いいな」

【唯鈴】

「ちよつと、お兄ちゃ」

【黄牙】

「よし」

満足そうに黄牙が電話を切る。

【陽】

「どうなったんだ？」

【黄牙】

「唯鈴を商店街で待たせてるから、お前、持って行ってくれ」

【陽】

「今からか？」

【黄牙】

「おう。ついでにデートでもして来い」

【陽】

「デート？」

【黄牙】

「弁当の礼だ。まさか、貰うだけとは言わねえよなあ？」

【陽】

「ん、まあ、そうだけど」

【黄牙】

「手を繋ぐまでは許してやる。だが、それ以上やったら——殺す」

【陽】

「心配するな。そんな気は無い」

【黄牙】

「んだと！？ 唯鈴には魅力がねえってのか！？」

【陽】

「いや、そうは言っていないだろ」

確かに、唯鈴ちゃんは可愛いと思う。

俺の事を慕ってくれているのもわかってるつもりだ。

でも、あの子はまだ中学生だ。

【陽】

「まだ、女性として意識する対象じゃないよ」

可愛い妹みたいな子であって、恋人とかそういうのはピンと来ない。

それに、唯鈴ちゃんは多分、俺を鼻屑目で見てると思う。

年上の相手に憧れるのはよくある話だ。

唯鈴ちゃんが今の俺くらいの歳になったら、きっとそんなのも無くなるだろう。

【陽】

「俺は『お兄さん』だよ、黄牙」

【黄牙】

「そうかねえ……」

黄牙が首を捻る。

納得していないらしい。

【陽】

「そうだって」

【黄牙】

「……ま、今はそれでいいけどよ」

【黄牙】

「弁当箱は届けてくれよ？」

【陽】

「わかったよ。それじゃ、行って来る」

【黄牙】

「頼んだぜ」

【陽】

「ああ」

<商店街>

商店街のアーケードに着くと、唯鈴ちゃんはもう来ていた。

【陽】

「唯鈴ちゃん」

【唯鈴】

「あ、お兄さん」

声をかけて走り寄る。

【陽】

「ごめん、待たせただろ」

【唯鈴】

「うっん、今来たばかりだよ」

【唯鈴】

「くすっ。朝とは反対だね」

そう言って、唯鈴ちゃんは面白そうに笑った。

【陽】

「はは、確かに」

【陽】

「じゃあ、はい」

弁当箱を唯鈴ちゃんに渡す。

【唯鈴】

「うん、ありがとう」

唯鈴ちゃんは、朝と同じ手提げ袋に弁当箱をしまった。

【唯鈴】

「それで、その……」

【陽】

「ん？」

【唯鈴】

「どうだった？ 味……」

もじもじと唯鈴ちゃんが聞く。

【陽】

「ん、美味しかったよ。よくできてた」

俺がそう言うと、唯鈴ちゃんの顔が輝く。

【唯鈴】

「ほんとっ!？」

【陽】

「ああ、本当だ。始めたばかりなのに、驚いたよ」

【唯鈴】

「よかったあ」

はーと息を吐く。

緊張していたんだな。

【陽】

「あ、そう言えば」

【唯鈴】

「どうかしたの？ お兄さん」

【陽】

「いや、黄牙におかずを奪われそうになって大変だったよ」

【唯鈴】

「えー！ だから一緒に食べないでって言ったのに」

【陽】

「ごめんごめん」

【陽】

「でも、まさかあんな違いがあるとは思わなくて」

【唯鈴】

「うつ……。実は、まだ成功率が低くて……」

【唯鈴】

「お父さんとお母さんにもお兄ちゃんみたいなお弁当を……」

成功率大体25%か。

大陣一家の方々、ご苦労様です。

【唯鈴】

「あ、でもでも、お兄さんのはちゃんとできたやつだよ」

【陽】

「わかってるよ」

【陽】

「俺のに上手にできたの入れてくれたんだろ？　ありがとな」

先輩の真似をして、ちょうどいい高さにある頭を撫でてあげる。

【唯鈴】

「えへへ」

唯鈴ちゃんは、頬を染めて嬉しそうに笑った。

【陽】

「さて、それじゃあ、行こうか？」

【唯鈴】

「行ってくて？」

【陽】

「お弁当のお礼をしようと思って。ワンパターンで悪いけど、何か奢るよ」

【唯鈴】

「え、いいよ。まだそんなに上手じゃなかったのに」

唯鈴ちゃんが手をぶんぶん振る。

【陽】

「そんな事無いって」

【陽】

「それに、実は黄牙にお礼して来いって言われてるんだ」

【唯鈴】

「えっ？ もう……お兄ちゃんったら」

【陽】

「そういう訳で、このまま帰ったら、俺が黄牙に怒られるからさ」

【陽】

「俺を助けると思って、奢られてくれよ」

【陽】

「もちろん、俺もお礼をしたと思ってってるし」

【唯鈴】

「お兄さん……」

【唯鈴】

「うん。それじゃあ、お兄さんに奢られてあげるね」

【陽】

「よし。で、何がいい？」

【唯鈴】

「うーん……何にしようかなあ」

【唯鈴】

「そうだ、商店街の向こうまで歩いて決めていい？」

【陽】

「ん、それはいいけど。商店街に何かあるのかなんて、覚えてるだろうか？」

【唯鈴】

「わかってないなあ。目で見ないと、欲しいってインスピレーションが湧かないんだよ」

【陽】

「へえ……」

わかるような、わからないような……

【唯鈴】

「それに、その間はお兄さんと一緒にいられるし……」

【陽】

「え？」

【唯鈴】

「なんでもなーい。ほら、行こっ」

【陽】

「？ ああ」

「ご機嫌な唯鈴ちゃんの後について、商店街を歩き出した。

.....

【陽】

「唯鈴ちゃん、決まった？」

【唯鈴】

「うーん、もうちょっと」

【唯鈴】

「あ」

きよろきよろと見回していた唯鈴ちゃんが目が、ある１点で止まる。

と言つても、それは何かの店ではない。

前から歩いて来ている３人の学生だ。

着ているのは、俺とは別の学校の制服。

こういう事はあまり言いたくないが、不良の多い学校としてよく知られている。

【不良A】

「ったく、あの野郎、むかつくんだよな」

【不良B】

「だよなあ、えらっそうにしゃがって」

何か気に入らないことがあったのか、通行人を睨んだり、ベンチを蹴ったりしている。

見た目や学校で人を判断するのは良くないと思うけど、

行動が思いっきり不良だ。

【唯鈴】

「行こう、お兄さん」

【陽】

「ん、目を合わせないようにね」

【唯鈴】

「うん」

あの手の連中とはかかわらないのが1番だ。

俺と唯鈴ちゃんは、そっちを見ないようにやり過ごすことにした。

したのだが……

【不良】

「おい、そこのお前！」

何が引つかかったのか知らないが、声をかけられてしまった。

【唯鈴】

「お、お兄さん……どうしよう？」

【陽】

「無視だ」

気づかなかった振りで何とかなるか？

【不良A】

「聞こえてんだろ？ お前らだよ！」

強引に肩を掴まれる。

【陽】

「……何だよ？」

内心で舌打ちしながら、振り返る。

絡まれないのが1番だが、絡まれたら下手に出ない方がいい。

気迫で負けるとろくな事にならないって教えてもらった。

特に、こんな人通りの多い場所ではそうそう大事にはできないはずだ。

【不良A】

「その服、嶺明だろ？ 中学生なんて連れて、ロリコンかあ？」

物凄い因縁のつけ方だな……

そこからどうやって話を発展させるつもりなんだろう？

【陽】

「だったら何だよ？」

【不良A】

「言いふらされなくなったら、口止め料払えよ。そうだな、1万でいいぜ」

理論の飛躍も物凄いな……

【陽】

「嫌だね」

そもそも、言いふらされて困るなら商店街を歩いたりはしないっての。

【不良B】

「お、こいつ今断ったぜ？」

【不良C】

「いい度胸じゃね？」

【不良A】

「覚悟はできてるよなあ？」

うわ、最悪の展開だ。

さて、どうしたものか。

【唯鈴】

「お兄さん……」

【陽】

「ん、大丈夫だ」

不安そうな唯鈴ちゃんを後ろに庇う。

参ったな。

喧嘩なんて数えるくらいしかした事がない。

別に強くもないし。

唯鈴ちゃんは、なんとか守らないと……

【不良A】

「おらぁ！」

不良の1人が殴りかかってくる。

2、3発も殴られてやれば、気が済むか。

って、え？

俺の目の前で、拳が止まっていた。

寸止めされたんじゃない。

横から手を出した誰かが、不良の腕を掴んでいた。

【不良A】

「な、何だてめえ!？」

【黄牙】

「何だって関係ねえだろ」

不良の腕を軽々と押し返したのは、

【陽】

「黄牙!」

【唯鈴】

「お兄ちゃん!」

【不良C】

「おうが……?」

【黄牙】

「楽しそうな事してるじゃねえか」

【黄牙】

「でも、こいつはお前のジャンルじゃねえだろ?」

そう言って、黄牙が俺達と不良の間に割り込んでくる。

こいつ、デートに行けとか言って、つけて来てたな。

まあいい。おかげで助かった。

【黄牙】

「ここは任せろ」

【陽】

「いいのか？」

【黄牙】

「おう。その代わり、唯鈴を頼むぜ」

【陽】

「わかった」

【陽】

「唯鈴ちゃん、行こう」

【唯鈴】

「あ……」

唯鈴ちゃんの手を引いて、走り出す。

ここは頼むな、黄牙。

<川原>

商店街を抜けて、駅前から通じる橋を渡る。

ちょうど、川を挟んで神社の反対側の位置だ。

神社の側は、崖になっているが、反対側のこちら側は川原がある。

そこまで走って、俺は足を止めた。

【陽】

「ここまで来れば大丈夫だろ」

黄牙が足止めしているのなら、

商店街にいたって追いつかれるとは思わないけどな。

【陽】

「唯鈴ちゃん、大丈夫か？」

【唯鈴】

「うん。私は大丈夫だよ」

唯鈴ちゃんは商店街の方を見る。

【唯鈴】

「お兄ちゃん、大丈夫かな」

【陽】

「大丈夫だろ。黄牙なら」

【唯鈴】

「うん、そうだよね」

【陽】

「今頃、唯鈴ちゃんが無事かどうか心配してるよ」

【唯鈴】

「そ、そうかな。えへへ」

恥ずかしそうに、けど少し嬉しそうに笑う。

黄牙はかなりのシスコンだけど、唯鈴ちゃんもわりとブラコン気味だ。

ある意味似た者兄妹とも言える。

それにしても、こうしているとあの時の事を思い出すな。

【唯鈴】

「お兄さん」

【陽】

「ん？」

【唯鈴】

「何だか、お兄さんと初めて会った時みたいだったね」

【陽】

「唯鈴ちゃんもそう思った？」

【唯鈴】

「お兄さんも？」

【陽】

「ああ、ちょうど思い出してた」

【唯鈴】

「そうなんだ」

【唯鈴】

「あのね、お兄さん」

少し改まった口調で、唯鈴ちゃんが言う。

【唯鈴】

「私、お兄さんに会えて良かった」

【陽】

「どうした、急に」

【唯鈴】

「ちょっと思っただけ。」

だって、私とお兄ちゃんが出会ったのなんて、本当に偶然だったから」

【唯鈴】

「もしも出会わなかったら、きっとお兄ちゃんは今と全然違ってたよ」

【陽】

「ん、それはそうかもしれないなあ」

今思い出しても奇妙な話だ。

俺と黄牙。

通っていた学校すら違う俺達は、

本来なら何の接点も無いはずだっただろう。

でも、2年前。

俺達は確かに出会った。

【陽】

「黄牙、か」

そして、俺は思い出す。

ごく普通の学生だった俺と、

無敗伝説を持ち、最強なんて言われていた不良学生、

『鬼』^{オーガ}との出会いを。

回想

アルカンシェル

Arc-en-ciel 〱 なないろのきざし〱
大陣黄牙&唯鈴編

< PAST VIEW >

< 学校 教室 >

【クラスメイトA】

「な、聞いたか？ 鬼の話？」

帰り支度をしていると、クラスメイトのそんな会話が耳に飛び込んで来た。

【クラスメイトB】

「鬼？ 幽霊でも出たって事？」

【クラスメイトA】

「違う違う。鬼^{オウガ}だよ。また派手に喧嘩したらしいぞ」

【クラスメイトB】

「え、マジかよ」

【クラスメイトA】

「俺達なんてきつと瞬殺だぜ」

【クラスメイトB】

「怖い事言っなよー」

【クラスメイトA】

「駅前の神社あるだろ？ あそこに屯してるらしいぜ」

【クラスメイトB】

「げ、俺ん家の近くだ。絡まれたらどうすっかなー」

そんな事を言っても、本気で絡まれるなんて思っても無いんだろ
う。

ふざけあつて笑っているクラスメイトを横目に、教室を後にした。

<道路>

【陽】

「オーガね……」

うちとは違う学校の有名な不良学生。

時々、喧嘩をしたとか他のグループを潰したなんて噂を聞く事が
あった。

どんな喧嘩にも負け知らずで、ついたあだ名が『鬼^{オーガ}』。

名前も大層だが、やってる事も物凄い。

暴走族を壊滅させたとか、日本刀を白刃取りしたとか嘘みたいな話も聞く。

そんな奴が俺と同じ年って言うんだから、信じられない。

きっと、身長が3mくらいあって、筋肉で服を破いたりできるに違いない。

いやまあ、それも噂だが。

【陽】

「ま、俺には関係ないか」

そんな危ない奴と関わる事なんて、一生無いだろう。

それより、これからどうするかの方が遥かに大事な問題だ。

あの、居心地の悪い家には、あまり帰りたくない……

どうせ、夜になったら帰らないといけないんだけど。

……商店街で時間を潰すか。

<商店街>

【陽】

「さて、どうしようかな」

本屋は昨日行ったし、

買い食いは、晩飯が食べられなくて大げさに嘆かれたばかりだしなあ。

【陽】

「ん？」

何か、向こうの方が騒がしいような……

ぼーっと眺めていると、人波が左右に割れて行く。

【陽】

「何だあ？」

【??】

「そこどけっ」

女の子を手を引いて、凄い形相で走っている奴がいた。

【ガラの悪そうな学生】

「待てやこらあ！」

【ガラの悪そうな学生】

「オーガ！ 逃げてんじゃねえ！」

しかも、その後ろから10人ほどのガラの悪そうな連中が、これまた凄い形相で追いかけて来ている。

そりや道も割れるな。

て言うか、オーガ？

【??】

「お、お兄ちゃん、もう無理……走れないよ……」

手を引かれていた女の子が、苦しそうに訴える。

【お兄ちゃん】

「唯鈴、くそっ」

女の子の手を引いていた男が周りを見回す。

【陽】

「あ」

【お兄ちゃん】

「お」

目が合ってしまった。

『お兄ちゃん』がずんずんと歩み寄ってくる。

【お兄ちゃん】

「おい、お前」

絡まれたー！

最悪だ……。

【陽】

「な、何ですか？」

【お兄ちゃん】

「こいつを任せる」

【唯鈴】

「きゃっ」

唯鈴と言う女の子の背中を押す。

腕の中に飛び込んできた女の子を反射的に受け取めた。

今、任せるって言ったか？

何がどうなってんだ？

【お兄ちゃん】

「いいか、死んでも守れよ。」

傷1つでもつけやがったら、てめえを殺してやるからな！」

【陽】

「は？ ちょっと、何を……」

【お兄ちゃん】

「わかったら、さっさと行けえ!!」

【陽】

「はいっ」

全くわからない。

わからないけど、『お兄ちゃん』の迫力に負けて、

俺は女の子の手を引いて、走り出した。

その後ろで、怒声とか悲鳴とか、

何かが壊れるような音が聞こえてきたのは、気のせいだと思いた
い……

<川原>

商店街を出てから橋を渡り、川原に下りて橋の下に身を隠した。

【陽】

「はぁ、はぁ、何なんだ、訳がわからない」

荒い呼吸を整えながら愚痴る。

何でこんな事になってるんだろう。

【唯鈴】

「あ、あの、ごめんなさい、お兄さん。お兄ちゃんが……」

気がつくと、女の子が小さくなっていた。

この子は、まあ悪くないんだろうなあ。

【陽】

「えーと、唯鈴ちゃん、だっけ？」

【唯鈴】

「あ、うん。大陣唯鈴です」

【陽】

「さっきのは、君のお兄さん？」

【唯鈴】

「大陣黄牙って言います。私のお兄ちゃんです」

黄牙、おうが、おーが、ね。

【陽】

「一応聞くけど、あの『鬼^{オーガ}』？」

【唯鈴】

「うう……その、『鬼^{オーガ}』です……」

【陽】

「あいつが、オーガ……」

何と言つか、想像と違って、

【陽】

「意外に普通だったな」

【唯鈴】
「へ？」

唯鈴ちゃんが目を丸くする。

【陽】
「ん？ どうした？」

【唯鈴】
「だって、今普通だったって」

【陽】
「ああ、鬼なんて呼ばれるくらいだから、もっとこつ、化け物みたいな奴かと思ってた」

【陽】
「身長が3メートルくらいで、筋肉の塊みたいな」

実際には、本名のもじりでオーガだったみたいだったけど。

【唯鈴】
「ぷっ。そんなわけないよー」

面白そうに唯鈴ちゃんが笑う。

【陽】
「ん、そうだったな」

【唯鈴】

「お兄さんって、変な人だね」

【陽】

「そうか？」

【唯鈴】

「そつだよ。すつごく変」

【陽】

「そんな評価をされたのは初めてだな」

【陽】

「どの辺りが変なんだ？」

【唯鈴】

「だって……」

笑っていた唯鈴ちゃんが、急に暗い顔になる。

【唯鈴】

「だって……誰も信じてくれないから」

【唯鈴】

「私が、お兄ちゃんは喧嘩が好きな乱暴者じゃないって、本当はすつごく優しいんだよって言っても……」

まあ、それが普通の反応だろうとは思っ。

俺だって、ついさっきまではオーガは化け物みたいな奴だと思っ
てたし。

でも――

【陽】

「そうだな。唯鈴ちゃんの言う通りだ」

【唯鈴】

「お兄さん……」

【陽】

「言ってる事は乱暴だったけど、唯鈴ちゃんの事を凄く大切にしてたもんな」

【陽】

「ただ乱暴な奴じゃないよ」

【陽】

「信じてくれないって人も、本物を見ればわかるよ」

【唯鈴】

「お兄さん……」

感極まったのか、唯鈴ちゃんの目に涙が浮かぶ。

【陽】

「うわっ、泣くなよ」

【唯鈴】

「ぐすっ。ごめんね、嬉しくて……」

「じしと目をこする。

【唯鈴】

「お兄さんみたいな人が、お兄ちゃんの友達だったらいいのに……」

【陽】

「そっか」

この子、本当に黄牙の事が好きなんだな。

こんなに想われてるんだ。

黄牙は、唯鈴ちゃんの言う通り優しい奴なんだろう。

【黄牙】

「こんなとこにいやがったか」

息を切らせて、黄牙が姿を見せた。

目に見える場所に怪我は無い。

普通なら無事に逃げ切ったんだと思う所だけど、

こいつの場合、無傷で勝ったと言われても頷けそうな気がする。

【唯鈴】

「あ、お兄ちゃん」

唯鈴ちゃんが嬉しそうに寄って行く。

【黄牙】

「唯鈴、怪我はねえ……」

何か言いかけた黄牙が、唯鈴ちゃんの顔を見て固まる。

【唯鈴】

「お兄ちゃん？」

【黄牙】

「お前……」

【陽】

「え、俺？」

【黄牙】

「よくも唯鈴を泣かせやがったな！ 殺す！」

そう来るのか！

【陽】

「いや、ほら、怪我はさせなかったし……」

【黄牙】

「泣かせんのもダメに決まってるだろうが！」

【陽】

「痛ってえ！」

殴られてしまった。

くそう、理不尽だ……。

<城崎家>

【陽】

「ただいまー」

家に入り、ダイニングに移動する。

【香奈枝】

「あ、お帰り、陽ちゃん」

城崎家の母、城崎^{かなえ}香奈枝がにっこり笑って出迎えてくれた。

【陽】

「ただいま。氷ある？」

【香奈枝】

「冷凍庫にいっぱいあるよ。どうしたの？」

【陽】

「ちょっと頭ぶつけたんだ。冷やそうと思って」

【香奈枝】

「ええ？ 大丈夫！？」

【陽】

「ん、まあ一応」

【香奈枝】

「ちよつと見せて」

頭をぺたぺたとさらわれる。

【香奈枝】

「きゃー、凄いいぶになつてゐるじゃない！　ちよつと待っててね」

キッチンに入って、ビニール袋に氷を入れ始めた。

【香奈枝】

「はい、陽ちゃん。しっかり冷やすのよ」

【陽】

「ん、ありがとう」

受け取った氷を頭に載せる。

全く……。

黄牙が優しいのは唯鈴ちゃんにだけじゃないのか？

<ANOTHER VIEW>

<大陣家 唯鈴私室>

【唯鈴】

「お兄さん……」

私は、今日出会った人の事を考えていた。

いきなりお兄ちゃんに私を押し付けられたのに、私の手を引いてくれた。

みんな、お兄ちゃんは乱暴で悪者みたいに言うのに、優しいって言ってくれた。

【唯鈴】

「本当に、お兄ちゃんの友達になってくれたらいいのにな」

今のお兄ちゃんのお友達は嫌い。

お兄ちゃんが不良みたいになっただのは、あの人達と付き合い始めてからだし。

あのお兄さんなら、お兄ちゃんの本当の味方になってくれる。

そんな気がする。

【唯鈴】

「……あれ？」

そう言えば、あのお兄さんの名前、何て言うんだろ？

【唯鈴】

「あーーーー、聞くの忘れてるー！」

何でこんな大事な事忘れてたんだろ……

どこかで、もう1回会えるかなあ。

<ANOTHER VIEW END>

<学校 教室>

大陣兄妹と出会った日から数日が経った。

【クラスメイト】

「おはよ、城崎」

【陽】

「ん、おはよう」

【クラスメイト】

「なあなあ城崎、お前がオーガと知り合いつて話、本当か？」

【陽】

「え？」

あの川原で話してたのを誰かに見られたのか？

確かに偶然出会いはしたけど、知り合いつてレベルじゃないんだ
けど。

勝手に尾ひれがついてるなあ。

【クラスメイト】

「なんてな！ お前が不良の親分と知り合いなんてありえないよな」

【陽】

「あ、おい」

勝手に納得して行ってしまった。

【陽】

「不良の親分、か」

ま、そんな認識なんだよな……

こりゃ唯鈴ちゃんも苦労するわけだ。

<川原>

放課後、俺は川原で時間を潰していた。

商店街で時間を潰すのにも飽きてたし、

夕方の風に吹かれながらぼんやりしているのも結構気持ちいい。

【陽】

「あれ？」

あっちから走って来てるの、黄牙……だよな？

何か、妙に焦ってるみたいだけど。

そんな事を考えている間に、黄牙は目の前まで来ていた。

向こうはまだ、こっちに気づいていないみたいだけど。

どうしよう。

声をかけるか？

偶然会っただけの相手に？

相手は不良の親分なんて呼ばれてる奴だぞ？

面倒事に巻き込まれるに決まってる。

そんな事はわかり切ってる。

だけど――

【唯鈴】

『お兄さんみたいな人が、お兄ちゃんの友達だったらいいのに……』

【陽】

「おい！ 黄牙！」

気がつくのと、俺は黄牙に声をかけていた。

<大通り2>

【陽】

「はあ！？ 唯鈴ちゃんが攫われたあ！？」

話す時間も惜しいと言った黄牙と並んで走りながら、

聞いた事情は、想像の遥か上だった。

【陽】

「マジなのか？」

起こりそうでない事が不意に襲って来る事があるのはわかったけど、

それでも、とても現実而降りかかって来る事とは思えない。

【黄牙】

「冗談でこんな事言うか！」

走りながら話しているくせに、平然と言い返してくる。

やっぱり鍛えられてるんだろうか。

【陽】

「ん、そうだよな」

【陽】

「どこの誰に攫われたかわかってるのか？」

【黄牙】

「わかってる。ブラッディオーガの連中だ」

【陽】

「ブラ……何だって？」

【黄牙】

「そんな名前のグループがあるんだとよ。隣の県に」

遠っ！

【陽】

「……何でそんな遠くからわざわざ来るんだよ」

【黄牙】

「俺が『オーガ』なのが気に入らないんだろうって言ってたな」

【陽】

「誰がそんな事知ってるんだ……」

【黄牙】

「うちの『参謀』だ」

【陽】

「今度は参謀かよ」

また凄い名前が出て来たな。

黄牙とオーガの法則から行くと、

【陽】

「本名が『さんぼう』なのか？」

【黄牙】

「いや、本名は軍司^{ぐんじ}だ」

【陽】

「へえ……」

軍司↓軍師↓参謀って感じの気がする。

【陽】

「お前の仲間はそんな妙なあだ名の奴ばかりなのか？」

【黄牙】

「自分で名乗りやしねえよ。いつの間にか勝手に付けられてんだ。って、んな話してる場合じゃねえんだよ！」

【陽】

「ん、そうだな。唯鈴ちゃんの居場所に当てはあるのか？」

【黄牙】

「この先の廃工場だ。ご丁寧に教えてくれたんでな」

【陽】

「廃工場……」

またそれっぽいワードが出てきたなあ。

【陽】

「わかってるなら、お前の仲間を連れて行けばいいんじゃないのか？」

【黄牙】

「できるわけねえだろ」

【陽】

「何で？」

【黄牙】

「あいつらは唯鈴がいたって気にせずに乱闘し始めるようなのばかりだからだ」

【陽】

「黄牙、お前——」

自分の危険も省みずに、妹の為に単身敵地に乗り込むなんて、

【陽】

「シスコンだな」

【黄牙】

「違えよ！ 妹思いなだけだ！」

【陽】

「ん、そういう事にしといてやるよ」

【黄牙】

「ちっ」

【黄牙】
「つつかよ、お前は何でついて来てんだ？」

【陽】
「いや、今更聞くのか」

【陽】
「唯鈴ちゃんを助ける手助けをするからに決まってるだろ」

【黄牙】
「は？」

黄牙があっけに取られたような顔をする。
ついでに、足も止まった。

【陽】
「何だよ？」

そんなに意外な事を言っ たつもりは無いぞ。

【黄牙】
「何でそんな事するんだ？ お前にメリットなんてねえだろ」

【陽】
「まあ、得はしないだろうけどな」

【陽】

「でも、聞いてしまったんだから、仕方ないだろ」

知り合いが不良グループの抗争に巻き込まれて攫われたなんて状況、無視するわけにはいかない。

面倒に巻き込まれる覚悟は、黄牙に声をかけた時に済ませてる。

ま、少し想像斜め上の展開ではあるけど。

【陽】

「それに、友達になって欲しいって言われたしな」

本当は、黄牙とだけど、唯鈴ちゃんだって友達になっていいだろう。

【黄牙】

「お前……」

黄牙は真面目な顔になると、俺の肩に手を置いた。

【黄牙】

「唯鈴を狙ってんのか？」

肩に置かれた手に、ギリギリと力が入る。

【陽】

「痛い痛い！ 力入れすぎだ！」

慌てて、手を振りほどいた。

【陽】

「何でそんな発想になるんだ。やっぱりシスコンだな」

【黄牙】

「妹思いだつてんだろ！」

< 廃工場前 >

黄牙の誤解を解いている間に、廃工場の前に到着した。

【陽】

「ここか……」

そのままドラマのセットにも見えそうな、いかにもな建物だ。

想像していたよりも大きい。

学園の体育館より少し小さいくらいの広さがあった。

【黄牙】

「っし、行くか」

【陽】

「待て待て待て待て」

ずんずん歩いて行こうとする黄牙を慌てて引き止める。

【黄牙】

「何すんだよ！」

【陽】

「それはこっちの台詞だ。何するつもりだったんだよ」

【黄牙】

「乗り込むに決まってるんだろ」

【陽】

「ダメに決まってるだろうが」

あー、ついて来て良かった。

【黄牙】

「何でだよ？」

【陽】

「あのな、向こうは唯鈴ちゃんを人質に取ってるんだろ？」

【黄牙】

「だから助けに来たんだろうが」

【陽】

「で、唯鈴ちゃんを盾にされたら、お前は手を出せるのか？」

【黄牙】

「無理だ」

即答かよ。

わかってたけどさ。

【陽】

「そうしたらアレだ、お前は叩きのめされて、唯鈴ちゃんはどうなる事か……」

【黄牙】

「なっ……」

何を想像したのか知らないが、

黄牙の顔色が面白いくらいに青くなる。

ま、いくらなんでもあんな小さい子をどうこつする程人間辞めては無いと思うけど。

何も考えずに突撃されても困るから、少し脅しておいてもいいか。

【黄牙】

「ど、どうすれば……」。

俺はどうすればいいんだああああっ!!!」

【陽】

「馬鹿！ 大きな声出すな！」

【黄牙】

「わ、悪いっ」

【黄牙】

「でもよ、一体どうすりゃいいんだ？ 何か手はあんのか？」

【陽】

「ん、そうだな……」

俺達の目的は、もちろん唯鈴ちゃんを助けることだ。

そのためには、ブラッディオーガって連中を倒さないといけない。

でも、まともに戦うためには唯鈴ちゃんを助ける必要がある。

で、助けるためには倒さなきゃならないわけで。

必要な条件がループしてしまってる。

何か、作戦を立てないとどうにもならないか。

【陽】

「とりあえず、偵察か」

………

俺達は、こっそり廃工場の裏手へと回った。

【陽】

「気づかれてないよな？」

【黄牙】

「多分な」

【陽】

「ん、よし。それじゃ、窓か何か探そう」

【黄牙】

「わかった」

手分けして、中の様子が探れる場所を探す。

.....

【黄牙】

「ちよつと来てくれ！」

【陽】

「見つけたのか？」

【黄牙】

「あそこから覗けるんじゃないか？」

黄牙が指差したのは、地面から2・5mくらいの所にある窓だった。

元から無いのか、廃工場になってから壊れたのかわからないが、

ガラスは無く、枠だけが残っている。

【陽】

「高いな……梯子か何かが無いと無理じゃないか？」

少なくとも、俺はそんなものを見た覚えは無い。

【黄牙】

「そんなもんは無かったぜ」

【陽】

「だから言ってるんだよ」

黄牙も見えないのなら、あそこから見るのは無理か。

でも、あそこ以外に無さそうだし……

あ、そうだ。

【陽】

「黄牙、俺を持ち上げられるか？」

窓を指差しながら聞く。

黄牙は俺の意図を察して、不敵に笑った。

【黄牙】

「余裕だ」

【陽】

「それじゃ、肩車してくれ」

【黄牙】

「おう、任せろ」

黄牙の肩車に乗って、持ち上げてもらう。

黄牙が立ち上がると、ちょうど窓の高さだった。

中を覗き込む。

廃工場の奥。

ちょうど、俺が覗いている窓のすぐ近くに唯鈴ちゃんが椅子に座らせられていた。

縛られていたりはない。ただ、椅子に座ってるだけだ。

その側に男が3人。

少し離れて、真ん中辺りに、1、2、3……7人か。

あれ、あいつら、この前会った時に黄牙と唯鈴ちゃんを追いかけた連中じゃないか？

まさか、県外から2回も来たのか？

不良つてのも大変なんだな……。

【陽】

「にしても、こう広いと、隅々までは見えないか」

機材や、棚の影に隠れているかもしれないが、そっちは見えない。

これ以上見えていても、収穫は無さそうだ。

【陽】

「黄牙、降ろしてくれ」

【黄牙】
「おう」

地面に降りる。

【黄牙】
「どうだった？」

【陽】
「相手は、見えるだけで10人。
唯鈴ちゃんはとりあえず無事みたいだったよ」

【黄牙】
「そっか」

【陽】
「安心するのは早いぞ。これからが本番だ」

【黄牙】
「そうだな……。で、何か思いついたのか？」

【陽】
「思いついたってほど大した策でもないけどな」

何の準備も無いこの状況では、これくらいしかやりようが無い。

【黄牙】
「構わねえよ。話してくれ」

【陽】

「ああ。まず、お前が正面から乗り込む」

【黄牙】

「それじゃダメだってお前が言ったんじゃないか」

【陽】

「無策で突っ込むのがダメなんだよ」

【陽】

「お前は困だ。適当に派手に暴れてくれ」

【陽】

「その隙に、俺があ窓から飛び込んで、唯鈴ちゃんを助ける」

唯鈴ちゃん的位置が窓の近くで良かった。

そうでなかったら、この作戦も使えないところだった。

【黄牙】

「それで？」

【陽】

「後は成り行きに任せる」

【黄牙】

「ふっ、何だそりゃ」

【陽】

「ん、やっぱりダメか？」

【黄牙】

「いや、そういうわかりやすいのはいい。気にいったぜ」

【陽】

「それはどうも」

【黄牙】

「んじゃ、やるか！」

【陽】

「ああ」

黄牙に、もう1度肩車してもらって、窓枠に手をかける。

そこから、黄牙の肩を足場にして、窓枠に登った。

中から見えないように、なるべく端に寄って、体を小さくする。

【陽】

「OKだ。派手に暴れて来い」

【黄牙】

「おう、任せろ」

黄牙はそう言って、走りかけ、

足を止めて振り返った。

【陽】

「どうした？」

【黄牙】

「いや……なんだ」

【黄牙】

「……………」

【黄牙】

「唯鈴を頼む」

重い一言だった。

本当は、自分が助けに行きたいだろうに。

唯鈴ちゃんを想う、その心を預けられた気がした。

【陽】

「任せろ、相棒」

【黄牙】

「馬鹿、なるのが早えよ」

軽口を叩いて、笑いあう。

そして、黄牙は廃工場の前へと走って行った。

【陽】

「大陣黄牙、か」

不思議なくらい、気が合うのを感じていた。

波長の合う相手ってこういう事を言うのかもしれないな。

廃工場の中が騒がしくなった。

【陽】

「始まったか」

窓から中の様子を伺う。

黄牙と真ん中辺りにいた連中が睨み合っていた。

唯鈴ちゃんの側の3人は動かない。

やっぱり見張りか。

黄牙の方で動きがあった。

ブラッディオーガの中から、1人が黄牙の前に出る。

【??】

「のこのこ現れたな。」

俺が、ブラッディオーガのリーダーだ」

【リーダー】

「この世に『オーガ』は2人いらな……がっ」

相手の話の途中で、黄牙がリーダーをぶん殴った。

リーダーは後ろによるめき、慌てた仲間達に支えられる。

【黄牙】

「話がなげえんだよ」

【リーダー】

「ふ、ふざけやがって……」

うわー、怒ってるなあ……

【リーダー】

「ぶっ殺せ!!」

【黄牙】

「やってみやがれ!」

乱闘が始まった。

黄牙は瞬く間に2、3人を殴り倒してしまった。

あいつ、ほんとに強いんだな……

【黄牙】

「そこで見てる奴、びびってんのかぁ!」

唯鈴ちゃんの側にとどまっている連中を、黄牙が挑発する。

それに釣られて、見張りのうち、2人がそっちに加わる。

チャンスだ。

1人くらいなら、俺にだって。

【陽】

「行くぞ……」

1度、大きく深呼吸し、

窓から身を躍らせた。

目標は、残った見張り！

【陽】

「食らえっ」

【B Oメンバー】

「な、うわっ！」

見張りを蹴り倒して、何とか着地する。

【唯鈴】

「お、お兄さん！？」

【陽】

「よ、助けに来たよ」

【陽】

「ほら、立って」

唯鈴ちゃんを椅子から立たせる。

【陽】

「怪我は無いか？」

【唯鈴】

「大丈夫だよ」

【陽】

「だったら、逃げるぞ」

【唯鈴】

「うんっ！」

唯鈴ちゃんの手を引いて走り出す。

後は、黄牙が暴れてる間にどさくさで脱出すれば……

【B Oメンバー】

「人質が逃げたぞ！」

【陽】

「うわ、もうばれた！」

進路上に、数人が立ちはだかる。

そして――

【陽】

「……最悪のパターンだな」

黄牙と一緒に、取り囲まれてしまった。

取りあえず、黄牙と背中合わせになって、唯鈴ちゃんを庇うように立つ。

【黄牙】

「どうすんだよ」

【陽】

「どうって、もうやるしかないだろ」

【黄牙】

「そっとうわかりやすいのは好きだ」

にやりと笑う。

俺も、覚悟を決めるしかないか。

【陽】

「黄牙、言う暇無かったけど、俺は喧嘩は初めてなんだ。コツってあるのか？」

【黄牙】

「初めてって、マジかよ？」

それでこんな事するなんて、信じられねえな……」

【陽】

「誰のせいだよ……。で、何かあるのか？」

【黄牙】

「そうだな……気迫で負けるな」

【陽】

「精神論かよ」

【黄牙】

「プロの格闘家じゃあるまいし、素人が手も足も出ねえ奴なんて、滅多にいねえよ」

【黄牙】

「群れてて慣れてて態度がでけえから強そうな気がするだけだ」

【陽】

「ん、なるほど」

【黄牙】

「っても、初めてじゃ戦力にはならねえか……」

【黄牙】

「じゃあねえな。お前は俺の目になれ」

【陽】

「目？」

【黄牙】

「俺は、見えてる攻撃は受けねえ自信がある。けど、背中には目がねえからな」

要するに、攻撃されたら教えろって事か。

【陽】

「わかった」

【黄牙】

「それと、唯鈴は死んでも守れ」

【陽】

「それはわかってるよ」

【黄牙】

「よし。頼むぜ、相棒」

相棒か、いい響きだ。

喧嘩の相棒は今回限りにしてもらいたいけど。

【陽】

「ああ、任せろ」

見よう見まねで身構える。

【リーダー】

「話し合いは終わったか？」

【黄牙】

「待っててくれて、ありがとう」

【陽】

「それがお前らの敗因だけだな」

【BOメンバー】

「んだと!？」

一斉に睨まれた。

正直、震えるほど怖い。

でも、怖がってたんじゃダメだ。

気迫で、負けない。

恐怖をぐつと抑えて、睨み返す。

【陽】

「そう怒るなよ。吠えるだけ、弱く見えるぞ」

【BOメンバー】

「こいつ、調子乗ってんじゃねえぞ!」

包囲をとり、向かって来る。

挑発に乗って来たな。

俺が黄牙の目に徹するなら、この位置関係を変えるわけにはいかない。

つまり、こっちから攻めるのは難しいって事だ。

向こうから攻めさせて、カウンターで潰す!

【陽】

「黄牙！」

【黄牙】

「おうよ！」

.....

.....

.....

<大通り2>

【黄牙】

「いやー、勝った勝った！ 気持ち良いなあ！」

【陽】

「何でお前無傷なんだよ.....痛てて.....」

あちこち殴られた傷が痛い。

それなのに、黄牙は無傷で笑っている。

何か理不尽だ。

【黄牙】

「経験が足りねえんだよ」

【陽】

「そんな経験いらないって」

【唯鈴】

「ごめんなさい、私のせいで……」

唯鈴ちゃんがぺこぺこ頭を下げる。

唯鈴ちゃんも、黄牙同様に無傷だった。

【陽】

「いや、唯鈴ちゃんは悪くないって」

【黄牙】

「じゃあ何だ、俺が悪いつてか？」

【陽】

「誰が悪いかって言うと、唯鈴ちゃんを攫った奴だけだな」

【黄牙】

「お、そりゃそうだ」

そんな話をしながら、橋まで帰って来た。

【陽】

「俺んちはあっちだけど」

橋の向こうを指差す。

【黄牙】

「家は反対だ」

【陽】

「そっか。じゃあな」

【黄牙】

「おう」

【唯鈴】

「ちょっと待って！」

【陽】

「ん？」

【唯鈴】

「えっと、お兄さんの名前、教えてくれる？」

【陽・黄牙】

「「あ」

【唯鈴】

「あ？」

【黄牙】

「そう言や、俺もまだ聞いてねえな」

【陽】

「ああ、すっかりしてたな」

【唯鈴】

「ええ！？ お兄ちゃん、名前も知らないのにあんな事させたの？」

【黄牙】

「いやー、はっはっは」

【唯鈴】

「笑い事じゃないよ。もう、お兄ちゃんたら」

【陽】

「何か言っ たつもりになってたんだよな。ははは」

【唯鈴】

「もう、お兄さんまで」

【陽】

「ごめんごめん。それじゃ、改めて」

【陽】

「城崎陽だ。よろしくな」

こうして、俺と黄牙、それに唯鈴ちゃんの関係は始まった。

会って、話をしたり、一緒に買い物に行ったり、

時々、黄牙のグループの仲間と間違われて喧嘩に巻き込まれたり、

厄介事もあったけど、それでも大陣兄妹と付き合うのは楽しかった。

そして、夏休みの最終日。

黄牙から思いもよらない頼みを聞く事になった。

<川原>

話があるからと呼び出された、いつもの川原。

【陽】

「今日はどうしたんだ？ 改まって呼び出すなんて、珍しいな」

【黄牙】

「お前に、頼みがあるんだ」

黄牙は、いつに無く真剣な表情をしている。

【陽】

「頼み？」

【黄牙】

「そうだ」

【黄牙】

「陽——俺に、勉強を教えてくれ！」

そう言って、勢いよく頭を下げた。

< P
A
S
T

V
I
E
W

E
N
D
>

六月十七日

アルカンシェル

Arc-en-ciel）なないろのきざし
大陣黄牙&唯鈴編

< 6月17日（水） >

< 学園 教室 >

授業が終わり、放課後になった。

【黄牙】

「あー、終わった終わった。帰ろっぜ」

【陽】

「ああ」

黄牙と2人で教室を出た。

< 学園 玄関 >

靴を履き替えて、黄牙を待つ。

……遅いな。

【陽】

「黄牙ー？」

【黄牙】

「今行く」

校舎の中から黄牙が出て来る。

【黄牙】

「悪い、ちょっと用事を思い出した。これから出て来る」

【陽】

「ん、そうか。じゃあ、俺は寮に帰ってるよ」

【黄牙】

「おう。じゃあな」

黄牙と別れて、俺は寮へと向かった。

<ANOTHER VIEW>

陽の姿が離れて行く。

それを見送りながら、ポケットの中の手紙を握り潰した。

まさか、昨日相手した奴の中に、俺のグループにいた奴が混ざってるとは思わなかった。

俺はさっぱり覚えてなかったけど、向こうは覚えてたらしい。

進学先を隠しちゃいねえから、入学してしばらくは戻って来いと
言われたり、

別のグループに誘われたりしてたけど、最近は無くなってたんだ
がな。

何を言つつもりか知らねえけど、さつさとすませるか。

<神社 境内>

俺は、手紙に書かれていた場所、神社へとやって来た。

最近までのアルカンシエルのたまり場で、

かつては、俺達のグループが集合場所としていたこの場所へ。

【??】

「お待ちしていましたよ、オーガ」

【黄牙】

「っ！ お前か」

待っていたのは、意外な男だった。

きつちりと着た制服と言い、妙に似合う眼鏡と言い、黙っている

と秀才みたいに見える。

だが、こいつは、そんなもんじゃない。

【??】

「お久しぶりですね。僕の事は、もうお忘れですか？」

【黄牙】

「忘れるわけねえだろ」

俺の人生は2人の人物との出会いで大きく変わった。

2人目は、言うまでも無く陽の奴だ。

そして、もう1人。

1人は、今、目の前にいるこの男。

【黄牙】

「『参謀』。斉藤軍司」

< P A S T V I E W >

自分の特徴を1つ挙げると言われたら、動体視力が優れている事だ。

じゃんけんか体育の授業でしか役に立たないと思っていたこの能力が、

殴り合いの喧嘩に役に立つと知ったのは、

絡んできた相手に喧嘩を売られた時、余裕で勝ってしまった時だった。

そして、その後で現れたのが、まだ『参謀』と呼ばれる前の軍司だ。

俺の通っていた学校は、そう荒れてたわけじゃねえけど、

それでも、不良学生がただ集まっているだけ、みたいなグループはいくつかあった。

その頃の軍司は、そのグループの1つに所属していた。

より正確に言うなら、パシリのように使われていたって所か。

【軍司】

「僕に力を預けてみませんか？ そうすれば、僕があなたを頂点へと連れて行ってみせますよ」

そんな言葉を言いながら俺に近づいてきた軍司は、俺に付きまとうようになった。

そして、当然のように、俺も不良連中の標的にされる事になってしまった。

そいつらの争いに興味なんて無かったが、

勝手に降りかかって来る火の粉は払わなけきやならなかった。

売られた喧嘩を買っては返り討ちにする。

そんな事を繰り返している間に、俺は1つのグループのリーダーと呼ばれるようになり、

軍司は俺の片腕として、グループの中での地位を築いていた。

俺は、軍司の下克上に利用されていたと気づいたが、

その頃には、そんな事はどうでも良くなっていた。

いつの間にか得ていた強者の称号。

他人の言う事なんか聞きやしない連中を従わせられるのは、悪くなかった。

そして、俺が『鬼^{オーガ}』、軍司が『参謀』と呼ばれるようになった時、

俺のグループは学校にあった全てのグループの頂点に君臨していた。

リーダーは俺って事になってるけど、実際に取り仕切っていたのは軍司で、

俺は、喧嘩の時に力を貸すだけだった。

軍司は俺の力を利用し、グループを纏め上げて大きくし、

俺はグループが得る名声を獲る。

お互いに利用し合うだけの関係。

だが、それでもいいと思っていた。

他にやりたい事も無く、このままずるずると付き合いが続くん
だ
と思っ
て
いた。

あの日、陽に出会うまでは。

< P A S T V I E W E N D >

【黄牙】

「今更、お前が何の用だ？ お前は1度も俺を引き止めなかつた
だ
ろ
」

嶺明に入学を決めた後も、入学してからも、

何人も俺に戻って来て欲しいと言って来た。

それなのに、こいつだけは、1度もそういう事をしなかった。

【黄牙】

「てつきり、もう用済みだと思つてたぜ？」

【軍司】

「それは違いますよ。僕はただ、あなたの意思を尊重しただけです」

【黄牙】
「はっ、だったらなおさらだな。俺がお前に会いたいと思ってるっても？」

【軍司】
「いいえ、そうは思いませんよ」

【軍司】
「ですが、僕がこうやって会いに来たのは、あなたのためですよ」

【黄牙】
「何？」

【軍司】
「あなたは回りくどいのは嫌いでしたから、単刀直入に言わせてもらいますよ」

【軍司】
「オーガ。あなたは、僕達の属する世界に帰って来るべきです。いいえ、こちらの世界でしか生きられないと言ってもいい」

【黄牙】
「何だと？」

【軍司】
「こんな話があります」

【軍司】
「戦争に行った兵士の中には、平和な世界に帰って来ても、その場

所に馴染めなくなってしまう者がいる、という話。ご存知ですか？」

【軍司】

「そして、あなたはその兵士と同じだ」

【軍司】

「あなたがなぜ、大したメリットも無いのに、僕に利用され続けていたのか。

それは、あなたが戦いと言う刺激に満ちた世界を望んでいたからですよ」

【軍司】

「そして、それは今も変わっていない。昨日の件で僕はそう確信しました」

【軍司】

「どうですか、オーガ。日常を退屈だと、思いませんか？」

俺が、今の日常に生きられないだと？

今でも、あの頃を望んでるってのか？

そんなはずが無い。

陽に会って、そんな世界が、望んだ場所じゃないって知ったんだ。

今だって、アルカンシエルの連中と楽しくやってる。

退屈だなんて思うはずがねえ。

【黄牙】

「そんなわけねえだろ。笑わせんな」

【軍司】

「そうですか。まあ、そうでしょうね」

【軍司】

「随分苦勞して手に入れた居場所ですから、『そんなはずが無い』
と思うのが普通ですから」

【黄牙】

「っ！」

【軍司】

「ですが、いつか自分を誤魔化す事もできなくなりますよ？」

【軍司】

「今のお友達を裏切って、かつての居場所ももう無くて。そんな事
になる前に、戻ってきませんか？」

【軍司】

「今ならまだ、オーガの伝説は生きていますよ？」

【黄牙】

「お、俺は……」

こいつの言っている事は、正しいのか？

確かに、こいつは、先を読むのが得意だった。

だから、『参謀』なんて呼ばれてたんだ。

でも、これが正しいのなら、俺は……

【軍司】

「あなたも混乱しているようですから、今日はこの辺りにしておきましょうか」

【黄牙】

「なっ、おい！」

【軍司】

「この場で答えを頂くとは思っていませんでしたから。

僕の連絡先は以前と同じですので、連絡を待っていますよ」

身を翻して、軍司が立ち去ろうとする。

【軍司】

「あ、そうそう」

【軍司】

「悩んでいるのなら、頼りになるお友達に相談したらどうですか？」

そう言って、軍司は神社を去って行った。

1人になった境内に、俺は立ち尽くしていた。

自分の心が、わからない。

俺が、いるべき世界はどこなんだ！？

頭の中に、1人の男の姿が浮かぶ。

昔と違う、今の世界を象徴する、俺の親友。

お前なら、答えをくれるのか？

いや……俺を、こっちの世界に留めてくれるのか？

【黄牙】

「……陽」

<大陣家 黄牙私室>

【黄牙】

「『実家に泊まるから、荷物を頼む』。これでいいか」

陽にメールを送って、携帯を机に置く。

俺は、寮には帰らずに実家に戻って来ていた。

こんな事、陽には話せない。

陽は、いつだって俺の味方をしてくれた。

俺が、今の生活を送れているのは、陽のおかげだ。

それなのに、その世界を退屈だと感じるなんて、

それは、陽への裏切りだ。

だから、俺が答えを出さないといけない。

そう思って家に帰ってきたのはいいが。

【黄牙】

「あー、わっかんねえ」

いくら考えても、わからなかった。

それどころか、考えれば考えるほど、軍司の言葉が正しい気すらしてくる。

って、それじゃいけないから考えてんだろうが！

でもなあ……

【唯鈴】

「お兄ちゃん、入っていい？」

部屋の外から、唯鈴の声がする。

【黄牙】

「いいぞ」

【唯鈴】

「お邪魔するね」

唯鈴が入って来る。

【黄牙】

「どうした？ 何かあったか？」

【唯鈴】

「何かあったのはお兄ちゃんの方でしょ？」

【黄牙】

「うえ？」

何で唯鈴がそれを？

【唯鈴】

「急に帰って来たと思ったら部屋に閉じこもって。
顔を合わせたらずっと難しい顔してたのに、気づかないわけ無い
でしょ。」

【黄牙】

「……そんな顔してたか？」

【唯鈴】

「自覚無かったの？」

唯鈴が呆れ顔で聞いて来る。

【唯鈴】

「それ、すごく重症だよ。何かあったの？」

【黄牙】

「お前には関係ない話だ」

唯鈴に話したら、絶対陽に伝わるに決まってる。

これは、唯鈴にも話せない。

【唯鈴】

「ひどーい。せっかく相談に乗ってあげようと思ったのに」

【黄牙】

「お前じゃどうにもならねえよ」

【唯鈴】

「ううー……」

唯鈴が俯く。

【唯鈴】

「話してくれないお兄ちゃんなんて……キライ」

【黄牙】

「なあっ!？」

嫌いって、そんな!

【黄牙】

「わかった! 話す。話すから」

【唯鈴】

「やった!

お兄ちゃん大好き！」

唯鈴がぱつと顔を上げる。

満面の笑みだった。

【黄牙】

「……はめられた」

【唯鈴】

「嘘つくお兄ちゃんも嫌いだよ」

上目遣いでじーっと見つめられる。

この顔には弱いんだよ……

【黄牙】

「わかったよ。でも、陽には言っなよ」

【唯鈴】

「お兄さんに？」

【黄牙】

「そうだ。じゃなきゃ話さねえ」

【唯鈴】

「わかった。お兄さんには内緒にする」

【黄牙】

「約束だぞ」

唯鈴に念を押して、俺は事情の説明を始めた。

.....

.....

.....

【唯鈴】

「お兄ちゃんの馬鹿」

それが、説明を聞き終わった唯鈴の第一声だった。

馬鹿って……ひでえな。

【唯鈴】

「それこそ、お兄さんに相談しないといけない事だよ」

【黄牙】

「でもよ、そんな事言ったら、陽を裏切ってるみたいだろ」

【唯鈴】

「そんな事無い！ 信頼してるから、相談するんだよ」

【唯鈴】

「お兄さんだって、隠されるよりもちゃんと話してもらいたいって思っに決まってるよ」

【黄牙】

「そ、そうか？」

【唯鈴】

「そうだよ。お兄ちゃん頭良くないんだから、一人で考えてたらダメ」

【黄牙】

「頭悪くて悪かったな！」

【唯鈴】

「きゃー、お兄ちゃんが怒ったー」

わざとらしく悲鳴を上げる唯鈴とじやれる。

何とかいつもの感じに戻ってきた。

心の中に立ち込めていた雲が晴れた気分だ。

ありがとな、唯鈴。

【黄牙】

「陽に話すよ」

【唯鈴】

「うん」

【唯鈴】

「きつとお兄さんなら、何とかしてくれるよ」

そう言う唯鈴の声には全幅の信頼があった。

そしてそれは、俺も同じだ。

【黄牙】

「……そうだな」

<ANOTHER VIEW END>

六月十八日

アルカンシェル

Arc-en-ciel）なないろのきざし

大陣黄牙&唯鈴編

<6月18日(木)>

<学生寮 食堂>

朝。

食堂に行くと、赤明と橙歌が待っていた。

【陽】

「おはよう」

【橙歌】

「やつほー」

【赤明】

「おはよう。」

あら？ 大陣君は？」

【陽】

「実家に帰った」

昨日の夜、そう連絡があった。

って事は、昨日の用は唯鈴ちゃんに会う事だったのかな。
それを忘れてるなんて、随分珍しい。

今日は雨が降るかと思った。

【赤明】

「何と言つか……妻に逃げられたみたいな台詞ね」

【陽】

「いやいや、気持ち悪いこと言わないでくれ……」

どうせ学園ですぐに会うんだから。

<学園 2年教室>

そろそろホームルームが始まるのに、黄牙がまだ来てない。

【陽】

「遅いな」

また寝坊か？

唯鈴ちゃんに起こしてって頼んでおけば良かったな。

勢い良く扉が開き、黄牙が駆け込んで来た。

【黄牙】

「あつぶねえ、セーフだ」

【陽】

「ギリギリだけだな」

【黄牙】

「間に合えばいいんだよ」

【黄牙】

「んな事よりも、陽」

【陽】

「ん？」

【黄牙】

「今日の放課後空けといてくれ。話がある」

【陽】

「それはいいけど、どうかしたのか？」

改まって時間を作って欲しいとは、また珍しい。

【黄牙】

「それは放課後に話す」

ここじゃ話せない話題か……

【陽】

「ん、わかった」

放課後まで待つか。

何だか、また厄介な話のような気がする。

こいつに真剣に頼まれると、大抵ろくな事にならないんだよな……

< P A S T V I E W >

< A N O T H E R V I E W >

< 大陣家 黄牙私室 >

【黄牙】

「もう、夏休みも終わるか……」

明日からまた学校が始まる。

授業受けるのなんて、たりいんだよな……

どうせ聞いちゃいねえってのに、時間の無駄だぜ。

【唯鈴】

「お兄ちゃん、入るよ？」

ドアを開けて、唯鈴が入って来る。

【唯鈴】

「うわ、寒い。冷房効きすぎだよ」

【黄牙】

「俺はこれがちょうどいいんだ」

【唯鈴】

「もう、昼からダラダラして。お兄ちゃんも明日から学校でしょ？」

【黄牙】

「だから最後にダラダラしてんだよ」

【唯鈴】

「ダラダラするのはいいけど、お兄ちゃん、ちゃんと宿題終わらせてる？」

あー、そんなのもあったな。

一度も開いてないけど。

【黄牙】

「何もやってねえ」

【唯鈴】

「えー。ダメだよ、ちゃんとやらないと。先生に怒られるよ？」

【黄牙】

「心配すんな。向こうも俺がして来るとは思ってたねえよ」

【唯鈴】

「余計ダメだよ……」

唯鈴は呆れ顔で呟き、

そして、不意に真面目な顔になった。

【唯鈴】

「お兄ちゃん。私、そんなのじゃダメだと思うよ」

【唯鈴】

「お兄ちゃんって受験生なのに、全然勉強もしてないし……」

受験勉強か。

しなけりやと思った事もあったけど、普段授業聞いてねえから全然わからねえんだよな。

復習するのも面倒だし、

そもそも自力でできるとは思えねえ。

【黄牙】

「まー、どうにかなるんじゃないか？」

【唯鈴】

「ならないよ。入る学校無くなってもいいの？」

【黄牙】

「あそこなら入れるだろ」

1つの学校の名前を挙げる。

【唯鈴】

「えー」

唯鈴が露骨に嫌そうな顔をした。

【黄牙】

「文句あんのか？」

【唯鈴】

「あるよ。そこって不良の学校なんだって、みんな言ってるよ」

【唯鈴】

「お父さんとお母さんも、そこには行かせたくないって行ってたし」

【黄牙】

「え、そうなのか？」

知らなかったぜ。

何で俺じゃなくて唯鈴に言っただ。

【唯鈴】

「私も、お兄ちゃんが悪者みたいに言われるのって、嫌だな」

【唯鈴】

「だって、お兄ちゃんは本当は優しいのに……」

【黄牙】

「唯鈴……」

正直、今の一言が1番効いた。

親父達が何を言っただって、別に気にしねえけど、唯鈴が嫌がる事はしたくない。

【黄牙】

「でもよ、それは無理だぜ」

【唯鈴】

「お兄ちゃん……」

【黄牙】

「仕方ねえだろ。勉強なんてわかんねえし、今更どうにもならねえよ」

【唯鈴】

「まだなるよ。ほら、誰かに教えてもらうとか」

【黄牙】

「俺の周りにそんなまともな奴がいると思うのか？」

教師には諦められてるし、

まともに進学するような奴らには避けられている。

『参謀』は頭いいだろうけど、あいつは俺達と同じ所に進学すると言っていた。

【唯鈴】

「うー」

唯鈴が悔しそうに唸る。

でも、無理なもんは無理だ。

【黄牙】

「もういいだろ、どうせ」

【唯鈴】

「あーーーー!!」

話の途中で、唯鈴が大声を出した。

【黄牙】

「な、何だ？」

【唯鈴】

「いるよ！ お兄ちゃんに勉強教えてくれそうな人！」

【黄牙】

「ああ？」

どこにそんな物好きがいるってんだ？

【唯鈴】

「お兄さん！」

【黄牙】

「だから何だよ？」

【唯鈴】

「違うよ。お兄ちゃんじゃ無くって、陽お兄さんの方!」

【黄牙】

「あ」

あいつか!

夏休みの少し前に知り合った男。

一言で言うなら、変な奴だ。

まともそうなのに、俺が『オーガ』だと知っても、普通に接して来る。

俺と一緒にいるせいで、喧嘩に巻き込まれる事もあるのに、

それでも去っていかない、変な奴だ。

そして、何よりもおかしいのが、

グループの仲間より、あいつの方が気が合うつて事だ。

【唯鈴】

「ダメかなあ」

唯鈴が上目遣いに俺の表情を伺う。

確かに、陽ならそれなりに成績とってそうだけど……

【黄牙】

「俺は良くて、あいつがどうだろうな」

【黄牙】

「受験生なのは同じだし、俺に構ってる暇なんてねえと思うけどな」

【唯鈴】

「でも、頼むだけやってみようよ」

【黄牙】

「わかったよ」

俺が頷くと、唯鈴の表情が明るくなる。

【黄牙】

「無理だったら諦めろよ」

【唯鈴】

「うんっ」

< ANOTHER VIEW END >

夏休みの最後の日、黄牙に呼び出されて、俺は川原を訪れた。

【黄牙】

「陽——俺に、勉強を教えてくれ！」

そう言つて、勢いよく頭を下げた。

【陽】

「は？」

状況がよくわからない。

何でいきなり？

【陽】

「どうしたんだ、一体？」

【黄牙】

「実は――」

黄牙が事情を説明してくれた。

唯鈴ちゃんに言われて、受験勉強をする気になった事。

でも、授業を真面目に受けていなかったから、全然ついていけなくて、

怖がられてるから教えてくれるような友人もないという事。

【陽】

「それで、俺に白羽の矢がたったわけだ」

【黄牙】

「そつ言つ事だ」

黄牙に勉強を教えるか……

そうだな。

【陽】

「ん、わかった。引き受ける」

【黄牙】

「何！？ 正気か？」

【陽】

「何で頼んでおいて、そこまで驚くんだよ」

しかも、『本気か？』ならともかく、『正気か？』って……

【黄牙】

「だってよ、お前も受験生だろ？ 俺に教えてる暇なんてあんのか？」

【陽】

「知らないのか？ 人に教えるには、普通の3倍理解してないといけないらしいぞ」

数学の教師が雑談でそんな事を言っていた。

普通の理解度がどのくらいなのかがさっぱりだけど。

【陽】

「俺も復習ができて、一石二鳥って事だ」

【黄牙】

「なるほどね」

【陽】

「で、どこを狙うんだ？」

【黄牙】

「あ、考えてねえわ」

【陽】

「おいおい……」

どれだけ暢気なんだよ。

【黄牙】

「俺だってさっきまで受験勉強するなんて思って無かったんだ」

【黄牙】

「お前はどこを受けるんだ？」

【陽】

「ん、嶺明だけど」

【黄牙】

「嶺明かよ……。お前、割と頭いいんだな」

嶺明はこの辺りではそれなりに高いレベルの学園だ。

と言っても、全国レベルでは全くの無名校になってしまいうレベルでしかないが。

もつとも、俺が嶺明を受ける事を決めたのは、全寮制だったからだけ。

【陽】

「頑張ったら割りとは誰でも入れると思うけどな」

少なくとも、生まれ持った才能がないとどうにもならなさそうな難関校には遥かに劣る。

【黄牙】

「だったら、俺でも受かるか？」

【陽】

「かなり頑張らないと無理だけどな」

【陽】

「でも、お前と同じ学校つてのも楽しそうだし、頑張ってもらおうか」

【黄牙】

「お手柔らかに頼むぜ」

【陽】

「はは、それは無理だ。夏休み中に決めてくれてたらもうちょっと余裕があったんだけどな」

今から受験に間に合わせてとなると、かなり厳しい。

【陽】

「早速明日……いや、今日からだな」

【黄牙】

「げ、マジで？」

【陽】

「マジだ。都合悪いかな？」

【黄牙】

「そうじゃねえけど」

【陽】

「だったら、やるからな。お前の家でいいだろ？」

【黄牙】

「お前、ほんとに自分の家嫌いだな」

【陽】

「人の部屋に入るなり爆笑した奴を入れてやるか」

【黄牙】

「だってなあ、カーテンとかピンクだし、人形とかぬいぐるみとかあるし」

【陽】

「俺の趣味じゃないって言ってるだろ」

俺がああの部屋を貰う前からあそこはああだったんだ。

【黄牙】

「だったら片付けりゃいいだろ」

【陽】

「そんなスペースはないよ」

【陽】

「いいから、ほら、行くぞ」

【黄牙】

「へいへい」

< P A S T V I E W E N D >

< 学生寮 213号室 >

授業を終えて、寮に帰って来た。

しばらく待っていると、黄牙が部屋に来る。

いつものテーブルを引っ張り出して、床の上に座る。

【陽】

「赤明がいないから、お茶は無いけど」

【黄牙】

「構わねえよ」

【黄牙】

「それより、話を聞いてくれ」

【陽】

「ん、わかった」

何だろう、いつもより余裕が無いように感じる。

少々困った事があっても、『ま、いいか』で済ます奴なのに。

これは、結構大変な事が起きてるのかもしれない。

【陽】

「何があつたんだ？」

【黄牙】

「これを見せてくれ」

黄牙が、ポケットからくしゃくしゃになった紙を取り出す。

開いて見てみると、『神社に來い』とだけ書かれていた。

誰かが黄牙を呼び出した手紙らしい。

でも、これだけで黄牙が悩むとは思えない。

呼び出されたら、俺に相談なんかしないで、

1人で行って叩きのめして帰って来る奴だ。

【陽】

「これは？」

【黄牙】

「昨日、靴箱に入ってたんだ」

【陽】

「ああ……」

【陽】

「昨日の用っていうのは、これが」

【黄牙】

「そうだ」

【陽】

「で？ 行っただろ？」

黄牙が頷く。

【黄牙】

「『参謀』がいた」

【陽】

「『参謀』って言うと、昔の仲間でナンバー2だった奴だよな？」

【黄牙】

「ああ。それで、戻って来ないかって言われたんだ」

【陽】

「お前、まさかそれで悩んでるのか？」

少し、腹が立った。

黄牙が『オーガ』として君臨していたのは、黄牙自身の望みではなかったはずだ。

だから、俺はその世界から連れ出して、今の日常を手に入れたと思っていたのに。

昔の仲間に誘われたからって、戻ろうとか思っなんて。

【陽】

「意外だな。お前が、戻ってもいいと思ってたなんて」

【黄牙】

「ちょ、待ってくれ」

黄牙が慌てて言う。

【黄牙】

「俺は、戻りたいなんて思ってたねえんだ」

【陽】

「じゃあ、何で悩むんだよ？」

【黄牙】

「『参謀』に言われたんだ。俺は、いつかこの日常を退屈に思っようになる」

【黄牙】

「昔の、刺激に満ちた世界でしか、生きられないって」

それは……

【陽】

「……あほだろ、お前」

【黄牙】

「なっ、俺は真面目に悩んでんだぞ！」

【陽】

「だからあほだっって言っんだ」

【陽】

「そんなの、他人にわかる訳無いだろ。それともあれか、お前はつまらないと思ってるのか？」

【黄牙】

「思ってたねえけど……」

【陽】

「だったら、そんな言葉に惑わされるなよ」

【黄牙】

「でも、あいつの言う事は、無視できないんだ」

【陽】

「何か、理由があるみたいだな」

【黄牙】

「あいつは、先を読むのが上手いんだ。だから『参謀』って呼ばれてたぐらいだ」

【黄牙】

「あいつの言った通りに、他のグループが仲間割れしたりするのを、俺達は何度も見てきた」

【陽】

「なるほど、ね」

先を読むか。

情報収集、状況判断、推理力あたりの能力に長けているんだろうか。

でも、今大事なのはそこじゃない。

問題は、『参謀』には確固とした過去の実績があるって事だ。

過去のデータは、判断のための大きな要素になる。

あの会社の作ったゲームが面白かったから、次に出るのも買おうとか、

あの職業は収入が多いので有名だから、将来その職業に就こうとか。

ほとんどの分野で、それなりの正確さを持つ判断材料だ。

『参謀』に実績があるせいで、

黄牙は『参謀』の言葉に必要な以上の説得力を感じていた。

【陽】

「まいったな……」

【黄牙】

「な、何か拙いのか？」

思わず呟くと、黄牙が捨てられた子犬みたいな目で俺を見る。

唯鈴ちゃんもたまにこういう顔をするけど、

【陽】

「お前がしても気持ち悪いだけだな」

【黄牙】

「は？」

【陽】

「いや、何でもない」

話題を修正しよう。

【陽】

「まあ、拙いと言えば拙いけど、どうにもならないわけじゃないから、心配するな」

【黄牙】

「本当か!？」

【陽】

「ん、本当だ。何かいい方法を考えるよ」

【黄牙】

「頼む」

【陽】

「ああ、任せろ」

<学生寮 食堂>

黄牙の話聞いた後、

部屋で方法を考えていたけど、行き詰ってしまったから、気分転換に夕食を食べに来た。

【陽】

「んー……」

一人で食べていると、話し相手もないから自然と思考に没頭してしまう。

何か考えるとは言ったけど、どうすればいいかなあ……

問題は、黄牙が『参謀』の言葉に妙な説得力を感じている事だ。

それが、黄牙に『戻るしかない』と言う考えが正しいんじゃないかと思わせている。

それをどうにかしないといけないわけだけど、

実績に裏打ちされた言葉を覆すのは、そう簡単な事じゃない。

考えられる手段としては、今の所2つ。

1つは、『参謀』の過去の実績を否定してしまう事。

土台を崩してしまえば、その上の理論も崩れ去るからな。

ただ、これが有効なのは、過去の実績が捏造だった場合だけだ。

黄牙のグループっていう複数人が、何度も体験している以上、それは考えにくい。

そう言う訳で、この方法はおそらく使えない。

となると、もう1つの方法だけど。

こっちは、『参謀』の言葉を肯定した上で、それを超える何かを提示する事。

要するに、黄牙に『退屈にはならない』と思わせればいいって事だ。

その為には、現状に α となる何かを見つけないといけない。

【陽】

「でも、それが問題なんだよな……」

元々黄牙が現状を退屈だと思っていたのならともかく、

黄牙はそうは思っていなかったはずだ。

それなのに、『参謀』に惑わされて、退屈かもしれないと思っている。

つまり、本来充実してた日々になんかを追加しないといけない。

そんな物が、そう簡単に見つかりはしないわけで、俺は頭を悩ませていたのだ。

【紫苑】

「先輩……先輩？」

【陽】

「ん？」

ふと気がつくと、誰かに声をかけられていた。

顔を上げると、食事のトレイを持った紫苑が立っている。

【紫苑】

「ここ、いいですか？」

俺の対面の席を指す。

【陽】

「ん、いいよ」

【紫苑】

「ありがとうございます」

紫苑が前の席に座る。

【紫苑】

「先輩、今日は1人なんですな」

【陽】

「ああ。約束してるのは朝だけだから」

夕食は結構バラバラだ。

とは言っても、示し合わせて食べに来ることも多いけど。

【陽】

「それにしても、今日は随分と遅いんだな」

もう、夕食の終了時間の間近だ。

食堂にいる人の数もかなり少ない。

【紫苑】

「それは先輩も同じじゃないですか」

【陽】

「ん、そうだな。」

ちよつと考え事してたら時間が過ぎてたんだ。
紫苑は？」

【紫苑】

「私は生徒会関係の手伝いで、学園に残ってたんです」

【陽】

「下校時刻過ぎてまでとは大変なんだな」

【陽】

「って言うか、紫苑って生徒会だったか？」

【紫苑】

「クラス委員長は役員扱いですよ。知らなかったんですか？」

【陽】

「全然知らなかった。そんなシステムになってたのか」

【紫苑】

「どうして1年も長く通っていて知らないんですか。信じられませ
ん」

呆れ顔でやれやれと首を振る。

【陽】

「自分に関係ない事って意外と知らないんだよ」

【陽】

「でも、この時期って何かあるのか？」

特にイベントのあるような時期じゃないんだけど。

【紫苑】

「学園に関係する事では無いんですが。ミステリ研を覚えていますか？」

【陽】

「ああ、紫苑を間違って誘拐した所だよな」

【紫苑】

「そうです」

【紫苑】

「そこから生徒会に要望があつて、その話し合いが長引いたんです」

【陽】

「へえ。こんな時間までご苦勞な事だ」

【紫苑】

「全くですよ。向こうも要求を通そうと必死で、ちつとも妥協してくれなかったので」

【陽】

「その割には不満そうじゃないな」

文句を言っているが、悪い感情を持っているようには見えない。

【紫苑】

「そうですか？」

【紫苑】

「だとすれば、好きだから必死になっている人は、見ていて悪く思えないんでしょうね」

【陽】

「ん、そういうのってあるよな」

【紫苑】

「本当に、趣味に生きているような人達なんですよ」

【陽】

「学園で誘拐事件起こす奴らだもんな」

【紫苑】

「ふふ、そうですね」

【陽】

「そうそう……って、ん？」

何か今、いい事を聞いたような……

【紫苑】

「どうかしましたか？」

【陽】

「ん……。紫苑、さっき何って言った？」

【紫苑】

「『そうですね』ですか？」

【陽】

「いや、その前」

【紫苑】

「『趣味に生きているような人達なんです』と言いましたけど」

【陽】

「それだ！」

【紫苑】

「はい？」

【陽】

「ありがとな、紫苑。この手段でやってみるよ！」

【陽】

「早く話さないと。じゃ、悪いけど俺は帰るから」

【紫苑】

「は、はあ。よくわかりませんが、頑張ってください」

【陽】

「ああ！」

俺は速攻で夕食を片付け、食堂を後にした。

< 学生寮 214号室 >

【陽】

「黄牙！」

廊下を走ってきた勢いで、黄牙の部屋に飛び込む。

【黄牙】

「な、何だどうした？」

部屋の中にいた黄牙が、目を白黒させる。

【陽】

「思いついたんだよ、こっちの世界を退屈にしない方法を」

【黄牙】

「お、マジか！」

【陽】

「ああ」

【陽】

「黄牙、お前には新しい趣味を見つけてもらおう」

【黄牙】

「は？ 趣味？」

【陽】

「そう、趣味」

【黄牙】

「何で趣味？」

【陽】

「簡単な話なんだけどな」

【陽】

「日常が退屈になるなら、ならないように、新しい事を見つければいいと思って」

【陽】

「趣味って言うと、副次的な要素みたいな気がするけど、その実、大会があつたり職業選択に関わってみたりと奥が深い所もあるからな」

【黄牙】

「な、なるほど……。
さすが陽だぜ、いい考えだ」

黄牙が何やら納得してるけど、その理由は実はあんまり関係ない。
本人に言うとお台無しだから言わないが、

実際の狙いは、黄牙に見つけさせる事にある。

退屈にならないための、新しい何かを自分で見つけた。

その事実それ自体が、この日常を生きる為の自身になるはずだ。

それに、その趣味を見つけるまでの間も、『趣味探し』というイベントで繋ぐ事ができる。

要するに、趣味を探すって行動そのものが、黄牙を繋ぎ止めておく作戦と言つ事だ。

いやー、この辺りの条件を全部満たせる物が中々思いつかなくて、
いつそ勉強でもさせるかとまで考えてたけど、

趣味なんてちょうどいいものがあつたとは。

何ですぐに思いつかなかったのか、不思議なくらいだ。

【陽】

「それじゃ、さっそく探そうか」

【黄牙】

「え、今日からか？」

【陽】

「当然。善は急げってね」

【黄牙】

「お、おう。わかった」

こうして、黄牙の趣味探しが始まった。

< 学生寮 213号室 >

とりあえず、散らかり放題の黄牙の部屋から、俺の部屋に移動し

た。

【黄牙】

「で、具体的にはどうすんだ？」

【陽】

「趣味を探すだけだ」

【黄牙】

「んな事はわかってるっての！」

【陽】

「怒るなよ、冗談だ」

【陽】

「具体的には、趣味になりそうな事をひたすらやってみる。これだけだ」

【黄牙】

「そんだけか？」

【陽】

「わかりやすくいいだろ？」

【黄牙】

「そりゃそうだな」

【陽】

「さて、それで、何をするかだけど」

【陽】

「実は何にも考えてない」

【黄牙】

「うおい！」

突っ込みを入れられても、食堂で思いついてから直行したんだから、仕方ない。

【陽】

「もう夜だし、室内でできる事だな」

【陽】

「ん、何があるか……」

【黄牙】

「ちまちましたのは止めてくれよ」

【陽】

「室内でちまちましてない事って言われてもな……」

【黄牙】

「性に合わねえんだよ」

【陽】

「お前の場合、食わず嫌いだろうが」

【黄牙】

「やらなくてもわかるだろ」

【陽】

「それでもやるんだよ」

趣味を探してる事が重要なんだから、何をするかは大した問題じゃないんだ。

もちろん、最終的には何か見つけないといけないんだけど、

趣味って、探したからって簡単に見つかるものじゃないし、気長に行くつもりだ。

【黄牙】

「でもなあ」

黄牙が渋る。

ここで拒否されると話が進まないんだけどな……

仕方がない。

対黄牙用秘密兵器を使うか。

【陽】

「わかったよ。ちょっと待て」

携帯を取り出して、メール作成画面を開く。

そして、唯鈴ちゃんに事情を説明するメールを送った。

ついでに、部屋の中でできる事について質問しておく。

唯鈴ちゃんの見解だったら、黄牙も賛成するだろう。

.....

待つ事数分。

【陽】

「お、来た来た」

返信が来た。

早速開いてみる。

From: 大陣 唯鈴

Subject: Re: 趣味探し

お兄ちゃんの相談に乗ってくれて
ありがとう。

部屋の中でできる事は、折り紙は
どうですか？

相変わらずメールは敬語なんだな。

それにしても、折り紙か。

黄牙は嫌がりそうだけど、ま、いいか。

【陽】

「黄牙、何するか決まったぞ」

【黄牙】

「何だよ？」

【陽】

「折り紙だ」

【黄牙】

「折り紙い？」

嫌そうな顔をするなあ。

でも、こつちには秘密兵器があるんだ。

【陽】

「唯鈴ちゃんがそう言ってる」

【黄牙】

「唯鈴が？」

【陽】

「ああ。今メールで聞いたんだ」

【黄牙】

「よし、やるぜ」

黄牙が、一瞬で態度を180°変える。

単純と言っか、シスコンと言っか。

ま、やってくれるんだからいいか。

【黄牙】

「でも、俺折り紙なんて持ってねえぞ」

【陽】

「あ。俺もだ」

と言っか、普通持ってないだろっ。

【黄牙】

「どうすんだよ。できねえじゃねえか」

【陽】

「そっだなあ」

他の事に変えるか？

でも、折角やる気になってるのに、水を差すのは避けたい。

【陽】

「代用品で何とかするか」

【黄牙】

「代用品？」

【陽】

「ちょっと待っててくれ」

鞆から、ルーズリーフを取り出す。

端から三角に折り、余った所を切り落とす。

これで、一応正方形になったはずだ。

同じ物を、何枚か作る。

【陽】

「こんなもんか」

【黄牙】

「おお、すげえ」

【陽】

「そんな感心される事でもないんだけど」

【陽】

「取りあえず、これでやってみよう」

【黄牙】

「おう」

手元に紙を1枚取って、折り始める。

【陽】

「それにしても、折り紙なんて久しぶりだよな」

【黄牙】

「そうだな。何年ぶりってレベルだ」

【陽】

「ん、俺もだ」

でも、意外と覚えてるな。

.....

【陽】

「できた。鶴」

思い出しながらだったから、微妙に不恰好だけど、一応できた。

【黄牙】

「俺もできたぜ。飛行機だ」

【陽】

「あつたなー、そんなの」

【黄牙】

「それっ」

黄牙が紙飛行機を飛ばす。

飛行機は真っ直ぐ飛んで、壁に当たって床に落ちた。

【黄牙】

「割と飛ぶな」

【陽】

「ああ」

.....

【陽】

「はい、二艘舟」

【黄牙】

「俺は手裏剣だ」

【陽】

「また投げるやつかよ.....」

【黄牙】

「おりゃ」

手裏剣を投げる。

壁に当たって、床に落ちた。

【陽】

「後で拾ってくれよ」

.....

【陽】

「えーと、家だ」

【黄牙】

「兜ってこれで良かったよな？」

.....

【陽】

「.....」

【黄牙】

「.....」

駄目だ。

レパートリーが既に無い。

【黄牙】

「だーっ、やっぱつまんねえよ！」

【陽】

「意外と奥が深いんだけどな、折り紙」

【陽】

「ドラゴンとか、ありえない感じのものもあるし。まあ、完成まで何十時間とかかるらしいけど」

【黄牙】

「やってられっか！」

【陽】

「だと思ったよ」

趣味探し1日目は見事に失敗に終わった。

.....

【陽】

「もうこんな時間か。続きは明日だな」

【黄牙】

「そうだな」

【黄牙】

「慣れねえ事したから、肩が凝ったぜ」

【陽】

「1日目からそれで大丈夫かよ」

【黄牙】

「大丈夫なんじゃねえか？」

【陽】

「根拠のない自信だな」

【黄牙】

「お前の考えた事だからな」

【陽】

「そんなに信頼されてると思わなかったな」

【陽】

「明日に備えて、ゆっくり寝てくれ」

【黄牙】

「そうすっかな」

【黄牙】

「っと、そうだ。陽」

帰ろうとした黄牙が振り返る。

【黄牙】

「やっぱ、お前に話して良かったぜ」

【陽】

「ん？」

【黄牙】

「いや、最初は話さねえつもりだったんだけどよ、唯鈴に『お兄さんに相談しろ』って言われたんだ」

【陽】

「おいおい……」

一人でどうにかなるとでも思ってたのか？

唯鈴ちゃんに感謝だな。

【黄牙】

「あー、そう言や軍司も同じ事を言ってたな」

【陽】

「え？」

【陽】

「軍司つて、『参謀』の事だよな？」

【黄牙】

「そうだけど、何かあんのか？」

【陽】

「ん、いや……」

【陽】

「それじゃ、また明日な」

【黄牙】

「おう、じゃあな」

黄牙が自分の部屋に帰る。

【陽】

「『参謀』……何を考えてる？」

黄牙を引き抜くのなら、他人に相談させない方がいいはずだ。

言いたくは無いけど、黄牙は結構単純だから、舌先三寸で丸め込める。

それなのに、俺に相談させようとした？

そこにある狙いはなんだろう。

わざとそう言う事で、黄牙を牽制しようとしたのか？

黄牙をこっちの世界に連れ出した俺への宣戦布告か？

それとも、他に何かあるのか……

何にしても、『参謀』が最大の敵なのは間違いない。

元は黄牙の片腕か何かしらないが、

俺は、あいつの親友として、黄牙を渡しはしない。

六月十九日

アルカンシェル

Arc-en-ciel）なないろのきざし

大陣黄牙&唯鈴編

< 6月19日（金） >

< 学園 図書館 >

昼休み。

黄牙を引っ張って、図書館を訪れた。

【黄牙】

「何だよ、こんな所に連れて来て」

【陽】

「ん、ここで趣味探しをしようと思って」

【黄牙】

「うげ……。お前、俺が字ばかりの本を読むの嫌いなもの知ってるだろ」

【陽】

「それはわかってるよ」

だから、読書を趣味にさせるのはさつさと諦めた。

【陽】

「どんな趣味があるかを探しに来たんだ」

【陽】

「今まで知らなかった面白い物があるかもしれないだろ？」

【黄牙】

「あ、そういう事か」

【黄牙】

「確かに、あるかもしれねえな」

【陽】

「納得したか？ それなら、探しに行こう」

.....

黄牙と2人で本棚を探す。

『文学』とか『科学』は普通だけど、『趣味』って棚がある事に驚きた。

【陽】

「やっぱり言うか、将棋とか囲碁の本が結構あるな」

【黄牙】

「頭使う奴は止めてくれ」

【陽】

「お前、別に頭悪くないだろ。勉強嫌いだからやらないだけで」

【黄牙】

「だから頭悪くなるんじゃないか」

それは確かに。

【陽】

「でも、これは遊びだぞ？」

【黄牙】

「駆け引きのいるゲームは苦手だ。ストレスが溜まる」

【陽】

「ポーカーはするの？」

【黄牙】

「あれはそんなに駆け引きはいらねえだろ」

【陽】

「それもそうか」

俺達がやってるのは賭けたり降りたりを省いて、役を作るだけだからな。

【陽】

「それじゃ、他のを探すか」

.....

【黄牙】

「陽、これはどうだ？」

【陽】

「ん？」

黄牙から本を受け取る。

【陽】

「『趣味の日曜大工』『日用品を日曜に作ろう』。微妙なセンスのタイトルだな……」

本を開いて中に目を通す。

中に書かれていたのは、主に木工の道具の製作法だった。

ベンチだとかテーブルとか、日用品と言うよりもアウトドア用品と言った方が近い。

【陽】

「お前がやりたいなら構わないけど、これ、作った後でどうするんだ？」

寮の一室に収まるサイズじゃない。

【陽】

「道具も揃えないといけないし、材料費も結構かかりそうだな」

【黄牙】

「うげ、面倒だな。そんなのはパスだ」

.....

んー.....。

趣味に関する本は結構あるけど、

実際にやるとなると、意外に限られてくるな。

探している段階だから、道具を買わないとできない類も却下だし。

買うのがダメとは言わないが、そんなに金に余裕のある生活はしていない。

.....お、これなんかいいんじゃないか？

【陽】

「黄牙、これどうだ？」

【黄牙】

「『塗り絵』だあ？」

俺が渡した本を見て、渋い顔をする。

【黄牙】

「昨日、ちまちましたのは嫌いだって言っただろ」

【陽】

「俺も、室内でやるんだから仕方ないって言っただろ」

【黄牙】

「何も考えずに体を動かしてる方が性に合ってたんだよ……」

黄牙が不満そうにぶつぶつ言っている。

我が侘な奴め……。

【陽】

「はぁ、わかったよ。」

明日は休みだから外に何か探しに行こう。
今日のところはそれで我慢してくれ」

【黄牙】

「……仕方ねえな」

【陽】

「それじゃ、教室に帰るか。もうすぐ授業だ」

【黄牙】

「ああ。そうだな」

<学生寮 213号室>

夕食後、さっそく黄牙の趣味探しを始める事にした。

今日は、『塗り絵』だ。

貸し出し手続きをした時に、『直接塗らないで下さい』って注意されたから、何枚かコピーを取ってきた。

色を塗る道具は、色鉛筆を使う事にする。

【陽】

「どれにする？」

コピーを机の上に広げながら、黄牙に聞く。

題材は、花や鳥の物が多い。

【黄牙】

「こいつにするか」

黄牙は『薔薇』の絵を選んだ。

【陽】

「ん、俺はこれにしよう」

『紫陽花』の絵にした。

【陽】

「それじゃ、始めるか」

【黄牙】

「おう」

紫陽花の花って、何色だっけ？

赤かったような、青かったような……。

【黄牙】

「薔薇つつつと赤だよな」

【陽】

「あ……」

黄牙が赤い色鉛筆を取り出す。

色鉛筆は12色の物が1セットだけしかないから、黄牙が使っている色は使えない。

【陽】

「青でいいか」

青い色鉛筆を取って、花の部分を塗り始めた。

……

【黄牙】

「うわ、はみ出た……」

【黄牙】

「ま、いいか」

【陽】

「いいのかよ」

【黄牙】

「よくねえけど、直せねえだろうが」

【陽】

「まあな」

色を塗るだけなんだから簡単かと思ってたけど、これが意外に難しい。

気を抜くとはみ出すし、

考えて塗らないと、色鉛筆の跡が変な残り方をして気持ち悪い。

濃淡だけで塗り分けをしないといけないのも、かなり大変だ。

既に失敗作の予感が漂っている。

【黄牙】

「陽、緑貸してくれ」

【陽】

「あ、まだ使ってる」

【黄牙】

「それじゃ俺が塗れねえよ」

【陽】

「仕方ないだろ……」

2人とも花から塗り始めたのが失敗だったな。

【陽】

「急ぐから、ちょっと待っててくれ」

【黄牙】

「しゃあねえなあ」

急いで茎を塗り始める。

適当に塗ってしまうか。

……

【陽】

「よし、終わり」

あちこちはみ出して酷いことになっているけど、気にしないことにしよう。

【陽】

「ほら、緑」

【黄牙】

「いや、もういらねえ」

【陽】

「ん？」

【黄牙】

「どうだ、これ」

黄牙が塗った絵を見せる。

【陽】

「……何だそれは」

【黄牙】

「青い薔薇だ」

【陽】

「青いのは花だ！ 茎を青くするな！」

色鉛筆には黄緑も残ってたのに、何で青を選んだんだろう……

【黄牙】

「こっちの方が面白くねえか？」

【陽】

「わからなくてもないけど……」

出来はともかく、塗っている間は楽しそうだ。

【黄牙】

「次行こうぜ、次」

【陽】

「ん、そうするか」

……

【黄牙】

「よし、これはどうだ？」

【黄牙】

「ピンクの鳩」

【陽】

「ぶっ」

思わず吹いた。

鳩の全身が、濃いピンクで塗られていた。

【陽】

「あはははっ、何だよそれ！」

【黄牙】

「な？ 面白いだろ？」

【陽】

「くくっ、いいな、それ」

後から思えば、この辺からおかしな事になり始めていた。

.....

【黄牙】

「よっしゃ、完成！」

【陽】

「こんどは何だ？」

【黄牙】

「金歯のワニ」

【陽】

「金なんてあつたか？」

【黄牙】

「ねえよ。ただの黄色だ」

【陽】

「それだと、ただ汚れてるだけみたいだけどな」

【黄牙】

「そう言われると……そう見えてきたぜ……」

一気にグレードが下がってしまった。

黄牙ががつくりと肩を落とす。

【陽】

「ところで、俺もできた」

【陽】

「虎2Pカラー」

【黄牙】

「うお、すげえそれっぽい」

【陽】

「だろ？」

【黄牙】

「負けちゃいられねえな」

.....

.....

.....

ふと気がつくと、もう元が何色だか想像もつかないような、極彩色の塗り絵が散らばっていた。

狙ってやってるだけに、子供が適当に塗ったのよりも酷い。

そして、その頃になると、

【黄牙】

「もう飽きたぜ」

飽きてしまっていた。

今日も失敗か……。

< P A S T V I E W >

< 大陣家 黄牙私室 >

黄牙に勉強を教え始めて、数日が経った。

ようやく、人に説明するのにも慣れてきたから、本腰を入れて教える事ができる。

【陽】

「お前の実力がわからないからな。今日はテストだ」

取り出したテストの問題を渡す。

【黄牙】

「まさか、作ったのか？」

【陽】

「いや、うちの一学期の期末試験。習った所全範囲だし、ちょうどいいかと思って」

黄牙の通っている学校は、うちとレベル的には変わらないはずだ。

解答もあるし、教材にちょうどいい。

【陽】

「さっそく解いてくれ。全部やる時間は無いから、今日は数学と英語にしよう」

【陽】

「最初は数学にするか。時間は1時間だ」

【黄牙】

「お前はどつするんだ？」

【陽】

「待ってる間か？ 自分の勉強してるよ」

【黄牙】

「そうか」

【黄牙】

「よっしゃ、やるぜ！」

【陽】

「頑張れ」

.....

.....

.....

【黄牙】

「陽」

【陽】

「ん？」

【黄牙】

「終わったぜ」

【陽】

「もう!？」

驚いて時計を見る。

まだ、始まって30分も経っていない。

【陽】

「早すぎだろ」

【黄牙】

「いや、まあな……」

黄牙が引きつった顔で笑う。

まさか……

【陽】

「見せてくれ」

解答用紙代わりのルーズリーフを受け取る。

【陽】

「うわ……」

半分以上が真っ白だった。

これなら早いはずだ。

【黄牙】

「仕方ねえだろ。わかんねえんだよ!」

【陽】

「キレるなって。今わからないから俺が教えるんだろ」

【黄牙】

「お、そうだな」

【陽】

「取り合えず採点するから、こつちを解いててくれ」

英語の問題を渡し、数学の採点を始めた。

.....

採点が終わった。

うーん……酷いな。

部分点のつけ方が適当だから多少ずれるかもしれないけど、得点は28点。

学年平均が72点だったから、これはかなり酷い。

【黄牙】

「終わったのか？」

俺が手を止めたのに気がついて、黄牙が聞いてくる。

【陽】

「ん、まあ」

【黄牙】

「……悪いか？」

『どうだ？』とか聞かないのを見ると、身の程は弁えているようだ。

【陽】

「悪いな、かなり」

甘い事を言っても仕方が無い。

事実を言っ、て、答を返す。

【黄牙】

「28点か……」

【陽】

「いつもその位か？」

【黄牙】

「そうだな」

【陽】

「ふむ……」

今回だけ調子が悪いとか、問題のレベルが違っ、て事は無さそうだな。

黄牙の実力がその程度っ、て事だ。

喜んでいいんだか悪いんだか。

覚悟はしていたけど、ここまで悪いとは思わなかった。

対策を考えないとな。

【陽】

「取り合えず、お前は英語の続きを解いててくれ」

【黄牙】

「お、おう。わかった」

黄牙は英語のテストに戻る。

俺は、改めて黄牙の答案に目を落とした。

.....

.....

.....

その後、英語のテストは30点。

予想よりも早く終わったから、追加でやらせた国語は多少マシで54点だった。

理科と社会のテストを宿題にして、その日は黄牙の家を辞した。

<翌日>

<大陣家 黄牙私室>

翌日の放課後。

俺は黄牙の家を訪れていた。

【陽】

「よう」

【黄牙】

「……来たのか」

俺の顔を見て、黄牙は驚いたような安心したような表情を浮かべた。

【陽】

「何だよ、来たらいけなかったか？」

【黄牙】

「そうじゃねえよ」

【黄牙】

「昨日のテスト酷かっただろ？ だから、もう教えねえって言われるんじゃないかと思ってたんだ」

こいつは、俺が見捨てるんじゃないかと思ってたのか。

……正直、思わなくもなかったけど。

【陽】

「宿題はやったか？」

【黄牙】

「お、おう。やってるぜ？」

【陽】

「カンニングしなかっただろうな？」

【黄牙】

「してねえよ！ 見りゃわかるだろ！」

【陽】

「どれどれ？」

黄牙から答案を受け取る。

採点するまでも無く、スカスカだった。

【陽】

「確かに、カンニングはしてないみたいだな」

【黄牙】

「だから言っただろうが」

【陽】

「そうだったな、悪い」

【黄牙】

「別にいいけどよ」

【陽】

「ん、そうか。それじゃ、今後の方針について話すよ」

【黄牙】

「じゃなくって、さっきの答えはどうした!？」

【陽】

「ん？ 見捨てる話か？」

【黄牙】

「そうだ」

【陽】

「正直に言っと、選択肢の1つにはあった。止めたけどな」

【黄牙】

「何でだよ？」

【陽】

「宿題をしてきたからだよ」

黄牙から受け取った答案をひらひらと振る。

【陽】

「成績悪い上にやる気がないのなら、俺も見放すけどな。やる気があるのなら、成績なんて取り返せる」

【黄牙】

「陽、お前……」

【陽】

「一緒に嶺明に行くんだろ？ 頑張ろうぜ」

【黄牙】

「おうよ、やってやるぜ！」

【陽】

「気合が入った所で、今後の話をしようか」

鞆から、昨日の黄牙の答案を取り出す。

【陽】

「1つ聞きたいんだけど、お前、最初の頃はそれなりにまじめに授業受けてただろ？」

【黄牙】

「あー、そうだな」

【陽】

「やっぱりか」

【黄牙】

「どうしてそんな事がわかるんだ？」

【陽】

「お前の解答を見てたら、最初に習う基本的な計算とか文法は一応押さえてあったからな」

【陽】

「古典はぼろぼろだったけど、現国の読解は結構点取れてたし。頭の出来はそう悪くないんだよ、知識が足りてないだけで」

【黄牙】

「なっ、そうだったのか!？」

【陽】

「いやまあ、単なる予想だけど」

【陽】

「それで、それを踏まえた今後の予定だけど、最初は基礎を固めようと思う」

【陽】

「数学とかの解説がいるようなのは俺が来てる時に教えるから、授業中に英単語とか、歴史とかの暗記する系統の勉強をしてくれ」

授業を聞いてないと思われてるんだから、別の事をやってても大丈夫だろ。

【陽】

「社会の授業とかは真面目に受けてもいいけど、そこは任せる」

【黄牙】

「わ、わかった」

【陽】

「できれば、この基礎固めは9月中に終わらせたいな。それが終わったら、ひたすら問題を解きながら応用を学ぶ。」

ついて行けるようになったら、授業も真面目に受ける。大体こんな所だ」

実際、これが正しいのかどうかはわからない。

所詮素人考えだ。

でも、俺が考えうるベストなのは間違いない。

だから、俺に教えて欲しいと黄牙が言った以上、この方法で黄牙を鍛えるしかない。

【陽】

「何か質問は？」

【黄牙】

「いや、ねえな」

【陽】

「そうか。それじゃ、さっそく始めよう」

こうして、俺と黄牙の受験勉強が始まったのだった。

< P A S T V I E W E N D >

六月二十日

アルカンシェル

Arc-en-ciel 〱 ないろのきざはし〱

大陣黄牙&唯鈴編

< 6月20日(土) >

< 商店街 >

土曜日の午前中。

俺と黄牙は商店街に来ていた。

今日は、約束通り外で趣味探しだ。

【黄牙】

「陽、ゲーセン行こうぜ」

初っ端から脱線していた。

【陽】

「こらこら、趣味探しに来たんだろうが」

今にも走って行きそうな黄牙の服を掴んで止める。

【黄牙】

「少しぐらい構わねえだろ」

ん……そうだな。

頭悩ます問題もあつたし、少し気分転換してもいいか。

【陽】

「わかったよ」

【黄牙】

「よっしゃ。行くぜ」

黄牙が意気揚々とゲーセンの中に入って行く。

俺は、その背中について行つた。

………

しばらく黄牙が格ゲーをしているのを後ろで見ていたが、

飽きてきたからそこを離れた。

しばらく、ゲーセンの中をうろついていたが、結局外に出た。

黄牙に付き合つて来る事は結構あるけど、俺はあまりゲームはしない。

あつという間にお金が減って、とんでもない無駄遣いをしている気分になるからだ。

【唯鈴】

「あれ、お兄さん？」

【陽】

「唯鈴ちゃん」

ゲーセンを出た所で、ばったりと唯鈴ちゃんに遭遇した。

手にビニール袋を提げている。

【陽】

「買い物？」

【唯鈴】

「うん。ちょっと足りないものがあつたから、買出しに来たの」

【陽】

「何を買ったんだ？」

【唯鈴】

「えっと、キャベツと豚肉とソースと」

【唯鈴】

「それと青海苔だよ」

袋をがさがさ言わせながら答えてくれた。

その材料からすると……

【陽】

「お好み焼き？」

【唯鈴】

「あつ、お兄さん正解！」

【唯鈴】

「お昼ご飯何にしようかと思って台所を探したら、お好み焼き粉が出てきたの」

【陽】

「なるほど、それでお好み焼きに」

【陽】

「それにしても、唯鈴ちゃんが作るのか？」

【唯鈴】

「実は、お母さんもお父さんも出かけてて」

唯鈴ちゃんが少し寂しそうな顔をする。

1人だけで食べるのは、寂しいのかな。

【陽】

「唯鈴ちゃん」

【唯鈴】

「え？ なぁに、お兄さん」

【陽】

「そのお好み焼きって、1人分しかないのか？」

【唯鈴】

「うっん、いっぱいあるよ」

【陽】

「それなら、俺と黄牙にも食べさせてくれないか？」

【唯鈴】

「もちろんいいよ！」

間髪いれずに返事が返ってきた。

それから、不思議そうな顔になって周りを見回す。

【唯鈴】

「お兄ちゃんもいるの？」

【陽】

「ああ、今日は外で趣味探しなんだ。今はゲームしてるけどな」

【唯鈴】

「……もう、お兄ちゃんは」

【唯鈴】

「ごめんね、お兄ちゃんがそんなで」

【陽】

「ん、唯鈴ちゃんが気にする事ないよ」

【陽】

「それに、唯鈴ちゃんの料理を食べたら、あいつもやる気出すだろ」

【唯鈴】

「あはは、それじゃ、頑張らないと」

【陽】

「それじゃ、黄牙を呼んで来るから」

【唯鈴】

「うん」

俺は、唯鈴ちゃんを残して黄牙を呼びに行った。

<大陣家 黄牙私室>

目の前にはホットプレート。

お好み焼きならと黄牙が引っ張り出して来た物だ。

その黄牙はと言うと、唯鈴ちゃんに台所に引っ張っていかれてしまった。

趣味探しの一環として、料理を試してみるらしい。

黄牙に料理か……

あいつ、料理なんか出来るのか？

心配だな。

黄牙の部屋の扉を開ける。

その瞬間、

【唯鈴】

「わー、お兄ちゃん、そんな風に切ったらだめえー！ 指が無くなっちゃうよー！」

【黄牙】

「お、おう。わかったぜ」

【唯鈴】

「わかってないよつ。何で包丁を逆手に持つの！？」

【黄牙】

「どつすりゃいいんだよー！」

【唯鈴】

「きゃー！ こっち向けないで！」

……うわあ。

俺は聞かなかった事にして部屋の扉を閉めた。

……

……

……

しばらくして、食器やボウルを持って、2人が部屋に来た。

2人とも、何だか疲れ切っている。

【唯鈴】

「お、お待たせー」

【黄牙】

「準備できたぜ……」

【陽】

「あー、ご苦労様」

あの騒ぎだったからなあ。

ちゃんと出来ただけでも上出来だよ。

【陽】

「それじゃ、今まで休んでたんだし、焼くのは俺がやるよ」

【唯鈴】

「うん、お願い」

唯鈴ちゃんからボウルを受け取る。

えっと、まずはホットプレートを加熱してっと。

【陽】

「ホットプレートっていいなあ」

【黄牙】

「何だ、お前ホットプレートフェチか」

【唯鈴】

「ええ！？ ホットプレート！？」

【陽】

「違う違う」

【陽】

「これがあったら、寮の部屋でも料理が出来ると思ったんだよ」

料理が好きでも得意なわけでも無いけど、焼肉とかできたら楽しそうだ。

【陽】

「でも、ちょっとでかいか」

【唯鈴】

「だったら、電磁調理器にしたら？」

【陽】

「ん、それはありだな」

ホットプレートより汎用性もあるし、そっちの方が便利かもしれない。

【陽】

「なあ、黄牙。お茶会用に電磁調理器買わないか？」

【黄牙】

「いや、ダメだね」

【陽】

「何でだよ」

【黄牙】

「料理みてえな面倒な事、やってられつか！」

【陽】

「……………」

そんな理由か。

【陽】

「趣味探し『料理』は失敗だな」

【唯鈴】

「みたいだね……………」

俺と唯鈴ちゃんは、顔を見合わせて深い溜息を吐いた。

……………

【陽】

「もういいだろ」

焼き上がったお好み焼きを皿に取り、ソースを塗る。

その上から鰹節と青海苔を振って完成だ。

【陽】

「はい、唯鈴ちゃん」

【唯鈴】

「ありがとう、お兄さん」

【陽】

「ほら、黄牙も」

【黄牙】

「おー、美味そうだ」

2人に渡して、自分の分も用意する。

【黄牙】

「さ、食おうぜ」

【陽】

「ああ。頂きます」

【唯鈴】

「頂きまーす」

お好み焼きを口に運ぶ。

もぐもぐ。

うん、ちゃんと焼けてるな。

もう一口。

もぐじやりもぐ……

じやり？

【陽】

「ん、何かじやりって言った」

【唯鈴】

「じやり？ ……あ」

【陽】

「何か心当たりが？」

【唯鈴】

「それ、多分お兄ちゃんが卵を割るの失敗した時のだよ。全部取ったと思っただけだなあ」

卵の殻だったのか。

まあ、それくらい構わないけど。

【黄牙】

「うーん、美味しい！」

黄牙は機嫌良く好み焼きを食べていた。

さつきとはえらい違いだ。

【黄牙】

「自分で作ると美味いって言うけど、本当だな！」

【陽】

「お前は邪魔してただけだろうが！」

【黄牙】

「いてっ」

一人でご機嫌な黄牙の頭を叩いておいた。

.....

.....

.....

昼食を片付けた後、

俺達3人は、部屋で相談をしていた。

もちろん、黄牙の趣味探しについてだ。

【陽】

「と、そんな感じで失敗続きなんだ。

鳩をピンク色にする時点でやる気が無いよな」

【唯鈴】

「あはは……。お兄ちゃんって体動かしてる方が好きだから」

【陽】

「ん、そうなんだよな」

【陽】

「それで、今日は外で出来る事にしようと思ってるんだけど、唯鈴ちゃん、何かいい案は無い？」

【唯鈴】

「うーん」

唯鈴ちゃんは少し考え、

【唯鈴】

「あ、あれはどうか」

【黄牙】

「何かあんのか？」

【唯鈴】

「うん。こっち」

唯鈴ちゃんはさっさと部屋を出て行く。

置いていかれた俺と黄牙は、慌ててその後を追いかけた。

<住宅街>

【唯鈴】

「ちょっと待っててね」

俺達を家の前に残して、唯鈴ちゃんは家の裏の方に回って行った。

【陽】

「あっちって、何があるんだ？」

【黄牙】

「物置だ。いらねえ物が突っ込んである」

【陽】

「へえ」

しばらく待っていると、唯鈴ちゃんがあるものを押して戻って来る。

【唯鈴】

「お待たせ」

【陽】

「唯鈴ちゃん、それは……」

【唯鈴】

「うん、一輪車だよ」

1つのタイヤとサドル。

ごく普通の一輪車だった。

【陽】

「俺、実物見たの初めてだ」

【黄牙】

「こんなのあつたのか……」

【唯鈴】

「多分、お父さんが買って来たんだと思うよ。
乗れなかったからしまつてたんじゃないのかな」

【陽】

「おじさんは何を思つて一輪車なんて買ったんだ？」

【唯鈴】

「さあ、なんでだろ？」

【黄牙】

「親父の考えてる事はわかんねえよ」

【陽】

「そ、そうか」

購入動機は謎だが、一輪車があるのは事実だ。

ありがたく使わせてもらつとしよう。

【陽】

「それじゃ、黄牙乗ってみろよ」

【黄牙】

「俺かよ」

【陽】

「お前の趣味探ししてるんだから当たり前だろっが」

【黄牙】

「ちっ、しゃあねえな」

【唯鈴】

「はい、お兄ちゃん」

唯鈴ちゃんが黄牙に一輪車を渡す。

黄牙はそれを受け取り、

そしてそのまま固まった。

【唯鈴】

「どうしたの？」

【黄牙】

「これ、どうやって乗るんだ？」

【陽】

「……どうやって、だろうな」

俺は見るのも初めてで、当然わからない。

唯鈴ちゃんも困った顔で首を捻っていた。

【黄牙】

「ま、やりゃわかるか」

【陽】

「気をつけるよ」

【黄牙】

「任せとけて」

黄牙は、一輪車を持って、一方のペダルに足をかける。

そして、

【黄牙】

「よっ」

飛び乗るような感じで、サドルを跨ぎながらも一方のペダルに足を乗せ、

【黄牙】

「うわぁっ!」

飛び乗った勢いのまま、横向きに倒れて行った。

【陽】

「黄牙!」

【唯鈴】

「お兄ちゃん、大丈夫!？」

【黄牙】

「大丈夫だ。あーびつくりした」

暢気に呟きながら、黄牙が起き上がる。

汚れているのは、片手の手の平だけだ。

あのタイミングでも、ちゃんと体を支えていたらしい。

相変わらずのとんでもない反射神経だ。

【黄牙】

「くそ、バランス悪すぎだろ。乗れるわけねえよ」

【陽】

「諦め早いなあ……」

【唯鈴】

「お兄ちゃん、乗らないの？」

地面に倒れた一輪車を起こしながら、唯鈴ちゃんが聞く。

【黄牙】

「もう乗らねえよ」

【唯鈴】

「だったら、私乗ってみたいな」

【黄牙】

「だ、ダメだ！　こんな危ねえ物にお前が乗るなんて！」

ばっ、と一輪車を取り上げる。

どれだけ過保護なんだよ。

【陽】

「まあまあ、いいじゃないか」

【黄牙】

「陽！　てめえ、唯鈴が怪我してもいいってのか？」

【陽】

「怪我しないようにすればいいんだろ。俺達が補助をするんじゃないか？」

【黄牙】

「う……ん……」

腕を組んで唸る。

物凄い葛藤が見て取れるな……。

【黄牙】

「まあ、それならいいか」

【唯鈴】

「やったあ」

唯鈴ちゃんがびょん、と飛び上がる。

【陽】

「それじゃ、とりあえず乗るところからだな」

【唯鈴】

「う、うん」

緊張した面持ちで唯鈴ちゃんが頷く。

【黄牙】

「どうする？」

【陽】

「ん……」

正しい乗り方みたいなのがあるんだろうけど、わからないからなあ。

適当に行くしかないか。

【陽】

「それじゃ、とりあえずサドルを足に挟んで」

【唯鈴】

「うん」

一輪車を前に傾けて、股に挟む。

【陽】

「下の方のペダルに足をつけて」

【唯鈴】

「うん、うん」

唯鈴ちゃんが、片方のペダルに足をつける。

【陽】

「黄牙」

【黄牙】

「おう」

【陽】

「唯鈴ちゃんの右腕を持ってくれ」

【黄牙】

「了解」

黄牙が唯鈴ちゃんの右腕を持つ。

【陽】

「唯鈴ちゃん、左手貸して」

【唯鈴】

「うん、わかったよ」

唯鈴ちゃんが伸ばした手を取る。

【陽】

「じゃ、体を起こすよ。黄牙、いいか？」

【黄牙】

「いつでもいいぜ」

【陽】

「それじゃ、3、2、1」

【黄牙】

「せーの！」

唯鈴ちゃんの腕を引いて、上体を起こさせる。

何とか、一輪車に乗っている形にはなった。

【唯鈴】

「うわ、お、とと、わ」

バランスが取りにくいのか、唯鈴ちゃんがふらふらと揺れる。

【陽】

「唯鈴ちゃん、落ち着いて。俺達が支えてるから」

【唯鈴】

「う、うん」

唯鈴ちゃんは、俺達に体を委ねてくれた。

一輪車はペダルとタイヤが直結しているから、ペダルが1回転すればタイヤが1回転する。

逆に言うと、ペダルを踏まない限りタイヤは回らない。

バランスを取ろうとして変に前後に動かれるよりは、支えに任せ
てじっとしていてくれた方がありがたい。

【陽】

「大丈夫か？」

【唯鈴】

「うん、もう大丈夫だよ」

唯鈴ちゃんがしつかりと答える。

乗った状態には慣れたようだ。

【陽】

「それじゃ、進んでみるか」

【唯鈴】

「大丈夫かな？」

【黄牙】

「心配すんな。俺達がついてるからな」

【陽】

「ん、その通りだ」

【唯鈴】

「……うん、そうだね」

【陽】

「俺達が手を引くから、唯鈴ちゃんはその分前進してくれ」

【唯鈴】

「わかった」

唯鈴ちゃんがしっかり頷く。

【陽】

「それじゃ、行くぞ」

【黄牙】

「おう」

【陽】

「1、2。1、2――」

黄牙と歩調を合わせながら、一歩一歩進んで行く。

ま、進んでいるのは唯鈴ちゃんだけで俺達は後退してるんだけどな。

【陽】

「1、2。1、2――」

【唯鈴】

「うわぁ。凄いよ、進んでる!」

一輪車の上で、唯鈴ちゃんのはしゃいだ声を出す。

【陽】

「楽しそうだな」

【黄牙】

「そうだな」

【黄牙】

「おわっ」

何かに躓いたのか、黄牙が転んで尻餅をついた。

すぐに手を離れたから、唯鈴ちゃんを道連れにはしなかったが、

俺は黄牙ほど素早く反応できなかった。

片手だけ引つ張られた唯鈴ちゃんが、前のめりに倒れてくる。

【唯鈴】

「きゃっ！」

【陽】

「唯鈴ちゃん！」

何とか、その体を受け止める。

だが、勢いは殺しきれずに、尻餅をついてしまった。

【陽】

「いっっ……」

【陽】

「唯鈴ちゃん、大丈夫か？」

【唯鈴】

「うん……何とか」

【唯鈴】

「お兄さんは？ 怪我しなかった？」

【陽】

「ん、ちょっとぶつけただけだ。大丈夫だよ」

【唯鈴】

「良かった……」

唯鈴ちゃんがほっと安堵する。

【唯鈴】

「あ、そうだ。お兄さん、助けてくれてありがとう」

【陽】

「ああ、どういたしまして」

【黄牙】

「こらあっ！ー！」

凄い剣幕で黄牙が割り込んで来た。

【陽】

「どうした？」

【黄牙】

「どうしたじゃねえよ！　いつまで抱き合ってたんだ！」

【陽】

「あ」

今更に唯鈴ちゃんと抱き合うような格好だったのに気がついた。

【陽】

「っと、ごめんっ」

慌てて体を離す。

【唯鈴】

「あ、ううん。……ちょっと嬉しかったかも」

【陽】

「え？」

【唯鈴】

「な、何でもないよ」

【黄牙】

「だからいちゃつくんじゃねえよ！」

【黄牙】

「もう……一輪車は禁止だー！！」

黄牙の絶叫が響くのだった。

< 学生寮 213号室 >

【陽】

「何だか疲れたなあ」

【唯鈴】

「うんー」

さっきまで黄牙の部屋を掃除していた唯鈴ちゃんも、

流石に疲れたのか、テーブルに体をくっつけてぐったりしていた。

家からついて来た唯鈴ちゃんは、今日はこの寮に泊まるつもりらしい。

黄牙は外泊届けを出しに行っている。

ちなみに、この学園寮は寮生が外で泊まるのには手続きは必要ない。

そのおかげで、門限を過ぎると締め出されるなんて事態に遭遇するわけなのだが。

そんな訳で、この寮において外泊届けと言えば、『部外者を寮に泊めるための届出』だ。

このシステムは恋人を連れ込んだらバレバレだと、一部で評判が

悪い。

過去に変更を求める運動があったけど、人数の少なさと、独り身の学生の妨害で失敗したらしい。

【陽】

「今日も失敗だったな……」

一輪車の後も色々と試してみたが、結果は全て空振り。

相手をした俺と唯鈴ちゃんが疲れただけだった。

今日で3日目だけど、相変わらず収穫はない。

趣味探しその物に意味があるとは言え、こう空振りばかりだと、無駄な事をしているような気がして、何だか気が滅入る。

【唯鈴】

「なかなか見つからないね」

【陽】

「ん、そうだな」

【唯鈴】

「お兄ちゃんが喜びそうな趣味って、何なんだろう？」

【陽】

「それがわかればこんなに苦労しないって」

【唯鈴】

「だねー」

【陽】

「発想に無理があつたかなあ？」

趣味なんて、やっぱりそう簡単には見つからないかもしれない。

趣味探しそのもの意味があるから、これからも続けるけど、

何か別の事を試してみるのもいいかもしれない。

【陽】

「趣味以外に黄牙を引き止められそうな物って、何かあるか？」

【唯鈴】

「うーん……」

考え込んでしまった。

【陽】

「うーん……」

【唯鈴】

「うーん……」

……

2人でうんうんと悩む事数分。

【陽】

「ダメだ。思いつかない」

【唯鈴】

「私も」

それが結論だった。

仕方ない。

【陽】

「こうなったら、最後の手段だ」

【唯鈴】

「最後の手段？」

【陽】

「アルカンシエルの力を借りる」

三人寄れば文殊の知恵って言うし、何かいい案が出るだろ。

.....

.....

.....

そういつわけで、急遽アルカンシエルのメンバーを招集した。

いきなりの呼び出しだったのに、すぐに全員が揃う。

みんな、割と暇なんだな……

ちなみに、作戦会議だから、黄牙は省いておいた。

いつもの様にお茶会の準備を整えている間に、初顔合わせのメンバーに唯鈴ちゃんの紹介をする。

そして、黄牙の過去はぼかしつつ、ざっと事情を説明した。

黄牙は話しても何とも思わないだろうけど、

そこから説明をすると、話が長くなって面倒だからだ。

【陽】

「と、言うわけで、みんなの知恵を貸して欲しい」

【唯鈴】

「お願いします」

唯鈴ちゃんがぺこりと頭を下げる。

【緑璃】

「もちろんだよ。お姉ちゃんに任せなさい」

【唯鈴】

「むぎゅ」

【緑璃】

「んー、可愛いなあ」

唯鈴ちゃんを抱きしめて、よしよしと頭を撫でる。

この人は人の世話を焼くと生き生きするなあ。

【紫苑】

「知恵を貸すのはいいですけど、具体的には何を考えるんですか？」

【陽】

「ん、それはだな、趣味以外で黄牙を夢中にできる物or事だ」

【紫苑】

「大陣先輩をですか……」

【橙歌】

「そんなの簡単じゃん。何でそんなに悩んでるのさ？」

考え始めてから、ほとんどノータイムで橙歌があっさりと言った。

【陽】

「ん？ 何かあるのか？」

そんなに簡単に思いつくものを見逃してとは思わないんだけど。

【橙歌】

「黄牙と言えば、唯鈴ちゃん。つまり、キーワードは『妹』だよ！」

【陽】

「な、なるほど……」

凄い説得力だ。

【緑璃】

「黄牙君って、そんなに妹が好きだったんだ」

緑璃先輩がしみじみと呟く。

【赤明】

「何だか、凄く危ない人みたいに聞こえるわね……」

【紫苑】

「そうですね……」

【藍叉】

『黄牙はシスコン？』

【陽】

「シスコンだな。本人は認めないけど」

【湖珠】

「そうなんだ？」

【陽】

「『俺は妹想いなんだ』って言ってるよ」

【橙歌】

「僕は同じだと思っただけだね」

【陽】

「俺もそう思う」

【唯鈴】

「お兄ちゃん……そんな印象なんだ」

唯鈴ちゃんが呆れた顔になる。

【橙歌】

「で、どうなのさ？ 僕のアイデアは」

【陽】

「ダメだ」

【橙歌】

「えー！？ 何でダメなのさ？」

【陽】

「現状に α するんだって説明しただろ。

唯鈴ちゃんは今もいるんだからダメに決まってる」

【橙歌】

「むー」

橙歌が不満そうに唸る。

【橙歌】

「だったら、妹増やせばいいじゃんか！」

【陽】

「妹を増やすって、お前……」

その発想は無かった。

と言うか、斜め上すぎるだろう。

【陽】

「意味わかって言ってるんだろうな？」

【橙歌】

「へ？ あ……」

却下された悔し紛れに言い放っただけだったらしい。

気まずい表情で黙り込む。

【藍叉】

『唯鈴』

藍叉が唯鈴ちゃんの肩を叩いて、注意を向けさせる。

【藍叉】

『お父さんとお母さんの仲はいい？』

【唯鈴】

「え？ うん、いいよ？」

不思議そうな顔で唯鈴ちゃんが答える。

【藍叉】

『増えるかも 妹』

【紫苑】

「風見先輩！　こんな子に何を言ってるんですか！」

【藍叉】

『大丈夫　最近の子は進んでる』

【紫苑】

「全然大丈夫じゃないですよ！　もう、信じられません！」

【緑璃】

「紫苑ちゃん、落ち着いて。ほら、愛し合ってたら子供ができるのは普通だよ」

【紫苑】

「あ、ああ愛し合うとか言わないで下さい！」

【緑璃】

「ええ！？　そんな意味で言っただんじゃないよお」

【唯鈴】

「愛し合って、子供が……あう……」

ようやく気がついたらしい唯鈴ちゃんが、真っ赤になってしまう。

もうグダグダだった。

………

【赤明】

「こほん。それで、大陣君の興味を引く話だけれど」

何事も無かったかのように、赤明が話題を仕切り直す。

【橙歌】

「いい考えだと思ったんだけどな。妹」

まだ引つ張るのか。

【陽】

「しつこいぞ」

【橙歌】

「別に生まなくても、養子を貰えばいいじゃん。ほら、義理の妹つてやつ」

養子、ね。

【陽】

「それも却下」

【橙歌】

「ええ！？　またあ？」

【陽】

「養子って簡単に言うけど、人一人の一生に関わる話だぞ？　軽々しく扱っていい問題じゃない」

【橙歌】

「う……。それはわかったけど、そんなに厳しく言わなくてもいいじゃん……」

橙歌が涙目になっていた。

【陽】

「あれ、そんなに厳しかったか？」

聞いてみると、みんなが揃って頷く。

そんなに厳しい言い方になってたか。

でも、それには理由があるんだから仕方ない。

【陽】

「いや、だって、血の繋がらない妹なんていたら、黄牙が一線を越えるんじゃないかと思うと……」

【赤明】

「それは……とてもありそうね」

【唯鈴】

「ええー……」

実妹であるところの唯鈴ちゃんが凄く困った顔になる。

【陽】

「だから、却下だ。いいよな？」

今度は不満の声は上がらなかった。

黄牙が、すっかり『危ないシスコン』扱いだ。

……ま、いいか。

【陽】

「さあ、そろそろ真面目に考えてくれよ」

【緑璃】

「うーん、人を惹きつける物って何だろう？」

【紫苑】

「お金、と言うのはどうですか？」

【橙歌】

「どっから出てくるのさ？」

【紫苑】

「そこまではちょっと。一般論として言うてみただけですから」

金ね。

確かに、一般的な意見としてはありだけど。

【唯鈴】

「お兄ちゃんはお金でなんて動かないよ」

【陽】

「ん、同感だな」

【紫苑】

「はい。私もそう思います」

紫苑も俺たちの意見に頷いた。

本気で言っていたのではなく、あくまで一般論を提示しただけだったようだ。

【赤明】

「金、と来たら、次は女かしら？」

【緑璃】

「それって、身を崩す方じゃないの？」

【赤明】

「一概にそうは言えないと思いますけど」

【赤明】

「力になる事もあると思いますよ」

【緑璃】

「あ、そうだね」

【藍叉】

『じゃあ 女で』

【陽】

「いや、頼むから実現できそうな事を言ってくれよ」

思わず口を挟む。

【陽】

「女って決めたとして、その女はどうするんだよ」

【陽】

「誰か、黄牙の彼女になってくれるのか？」

【橙歌】

「それは無いね」

【緑璃】

「そうだね。あ、もちろん、黄牙君の事は嫌いじゃないよ？」

【赤明】

「でも、いきなり恋人になるのは無理ね」

【紫苑】

「私も遠慮させていただきます」

【藍叉】

『（ふるふる）』

と首を振る。

【湖珠】

「それは無いんだよ」

全滅だった。

【藍叉】

『唯鈴は？』

【唯鈴】

「え？ でも、私は妹だから」

【湖珠】

「上手く誤魔化せないかな？ 髪型を変えたり、お化粧したりして」

【橙歌】

「それ、いい考えじゃん」

【赤明】

「いける、かもしれないわね」

【陽】

「いけないって……」

また変な方向に……

【赤明】

「どうかしら？ 大陣君の為に、やってみない？」

【唯鈴】

「……私、やるよ。お兄ちゃんのために！」

………

準備をするとかでみんなは唯鈴ちゃんを連れて出て行った。

俺1人、部屋で留守番だ。

みんなノリノリだったけど、

唯鈴ちゃんを黄牙の恋人に仕立てると妙な事になるのを忘れているんじゃないのか？

.....

.....

.....

しばらくして、みんなが部屋に帰ってきた。

要人警護をするみたいにな、唯鈴ちゃんを囲んでいて、唯鈴ちゃんの姿は見えない。

【緑璃】

「陽君、びっくりしちゃダメだよ。唯鈴ちゃん、すごく可愛くなつたから」

緑璃先輩が前置きして、みんなが道を開ける。

その中から、唯鈴ちゃんがゆつくりと出て来た。

【陽】

「へえ——」

先輩が言っただけの事はあった。

いつものツインテールがとかれて、いつもより長く感じる髪が背中流されている。

薄く化粧もしていて、いつもよりずっと大人っぽく感じる。

誰かのを借りたらしい服（サイズの多分先輩）もよく似合っていた。

【唯鈴】

「お兄さん、どうかな？」

もじもじしながら、唯鈴ちゃんが聞く。

【陽】

「ん、凄く新鮮な感じだ。可愛いよ」

【唯鈴】

「ほんとっ？」

【陽】

「ああ、本当だ」

【陽】

「でも……」

【唯鈴】

「でも？」

【陽】

「やっぱり唯鈴ちゃんだよ」

いつもと違う印象だけど、やっぱり唯鈴ちゃんは唯鈴ちゃんだっ

た。

初対面の女の子には見えない。

【陽】

「俺が気づくんだから、黄牙は誤魔化せそうにないな」

【唯鈴】

「そっか……」

唯鈴ちゃんが残念そうに呟く。

【唯鈴】

「でも、お兄さんに可愛いって言って貰えたから、いっか」

【緑璃】

「良かったね、唯鈴ちゃん」

【唯鈴】

「うんっ。ありがとう、緑璃お姉さん」

【緑璃】

「どういたしまして」

そう言って、なぜか唯鈴ちゃんの頭を撫でる。

【紫苑】

「でも、これでまた振り出しですね」

【陽】

「そうだな。また別の手を考えるか……」

【橙歌】

「だったらさ、もう陽が女装すればいいじゃん」

【陽】

「は？」

こいつ、今何を言った？

【赤明・紫苑】

「女装……」

常識組の2人が複雑な顔で呟く。

女子メンバーを使うのもダメだけど、女装もどつたらうとか思っているんだろう。

【緑璃】

「いいんじゃないかな？」

【藍叉】

『割とアリ』

【陽】

「あるか！」

【湖珠】

「私もいいと思うんだよ」

【湖珠】

「城崎君って、そんなに男男した顔立ちじゃないし、多分、お化粧とかで誤魔化せるんだよ」

その言葉で、女子メンバーの視線が、俺の顔に集中する。

【赤明】

「……言われてみると、そんな感じもするわね」

【橙歌】

「確かに、するね」

【陽】

「いやいや、今まで女顔なんて言われた事は無いぞ」

【紫苑】

「それはそうですよ。男女では骨格が違いますから。あくまでも男性としては、というレベルです」

【紫苑】

「でも、衣装や化粧で雰囲気を変えてしまえば何とかかなりそうですね」

紫苑、お前もか……

【藍叉】

『本物の女の子はダメなんだから 覚悟を決めて』

【藍叉】

『黄牙のためでしょ?』

【陽】

「それはそうだけど……」

でも、女装って何か違うだろ。

困難のベクトルが変だ。

【緑璃】

「陽君の方が黄牙君よりもちょっと背が低いから、組み合わせてもばっちりだね」

【陽】

「俺と黄牙がベストの組み合わせみたいな方向で進めない下さいよ……」

一応言ってみたけど、もうみんな聞いていない。

わいわいと女装について相談し始めてしまった。

【紫苑】

「髪型はどうしましょうか？ 変えた方がいつもと印象を変えられると思いますけど」

【赤明】

「誰か、ウィッグとかエクステとか持っていないかしら？」

【緑璃】

「普通は持ってないんじゃないかなあ？」

【湖珠】

「演劇部が持つてる気がするんだよ」

【橙歌】

「別に長さ変えなくてもいいじゃん。ショートでも弄りようはあるしさ」

【藍叉】

『服は？』

【緑璃】

「体のラインの出ない服がいいよね」

【紫苑】

「あ、それなら私持ってます」

【紫苑】

「前に実家に帰った時に母が買っていた物なんですけど、大き過ぎて着られなかったんです」

【赤明】

「それ、どんな服？」

【紫苑】

「ローウエストのワンピースです。
スカートの丈も長いですから、ちょうどいいんじゃないですか？」

【藍叉】

『Good job』

【紫苑】

「ありがとうございます」

【橙歌】

「でもさ、胸が無いのは寂しいよね」

【緑璃】

「そうだね」

【橙歌】

「先輩、ちょっとおっぱい分けてよ」

【緑璃】

「ええー！？ 無理だよお」

【赤明】

「何を無茶苦茶な事を言ってるのよ」

【橙歌】

「だってさあ」

【赤明】

「誤魔化せればいいのだから、スカーフでも巻けばすむ話じゃないの。私が貸すわ」

【湖珠】

「下着……は見られないからいつか」

【陽】

「……………」

何なんだろう、このノリは。

着せ替え人形かなんかと間違えてるんじゃないのか？

【陽】

「盛り上がってるところ悪いけど、俺は女装するなんて一言も言っていないんだが」

【みんな】

「ええー」

一斉に非難の視線が集中した。

【藍叉】

『空気読め』

【橙歌】

「だよね。正直がっかりだなあ」

【陽】

「俺が悪者みたいに言っつなよ！」

【陽】

「そつだ、唯鈴ちゃんも何か言っつてくれよ」

さつきから、みんなの話に加わってない唯鈴ちゃんなら……

【陽】

「っつて、唯鈴ちゃん？」

なんだか、ぼんやりしている。

心ここにあらず、という感じだ。

【唯鈴】

「……お姉さん、なら……甘えられるかも……」

小声で何か呟いている。

【陽】

「唯鈴ちゃん？」

【唯鈴】

「ひゃっ！」

【唯鈴】

「な、何？ お姉さ……あ」

【陽】

「……………」

止めを刺された気分だった。

【陽】

「わかったよ。着ればいいんだろ」

どうせ、着たらキモい女装男が出来上がるに決まってる。

そうしたら、諦めてくれるだろ。

【橙歌】

「やった、了解ゲット！」

【緑璃】

「それじゃあ、みんなで準備しようか」

【みんな】

「はい」

.....

.....

.....

すぐにみんなの手で、衣装が揃えられた。

一通り、着方を教えてもらって、部屋から出てもらう。

【陽】

「はぁー」

心から溜息を吐いて、可愛いワンピースを手を取った。

「こそこそ。」

四苦八苦しながら、着慣れないワンピースに袖を通す。

うう.....一秒毎に何か大切な物が削られてる気がする.....。

えーと、次は……

【陽】

「これか……」

誰だよ、ニーソックスなんて持って来たのは。

……

一応着替え終わった。

この部屋には姿見が無いから、どんな格好になっているのかイマイチわからない。

【陽】

「着替えたけど」

外に声をかけると、みんなが戻って来る。

【橙歌】

「うわぁ……」

【陽】

「『うわぁ……』って何だよ!」

何でそんな微妙なんだよ。

もうちょっとわかりやすい反応にしてくれ!

【橙歌】

「だって、ねえ？」

【赤明】

「そうね……『うわぁ』だわ」

あんまりな反応に不安がどんどん積もっていく。

【陽】

「だから、何なんだよ！」

【赤明】

「後でわかるわ」

【赤明】

「次に行きましょう」

【紫苑】

「そうですね。髪はどうします？」

ドライヤーとブラシを持ちながら、紫苑がみんなに聞く。

やっぱり俺の意見なんて無視なんだな……

【緑璃】

「トップの所はいつもちょっと跳ねてる感じだから、大人しめに寝かせちゃおうか」

【紫苑】

「わかりました」

.....

【紫苑】

「こんな感じですか？」

【橙歌】

「ちょっと物足りないんじゃない？」

【赤明】

「毛先を跳ねさせてみるとか」

【紫苑】

「新嶋先輩みたいにですね。やってみます」

.....

【紫苑】

「これでどうでしょうか？」

【藍叉】

『もう一声』

値切ってるんじゃないんだから。

【湖珠】

「なら、これ付けてみる？」

夏原がヘアバンドを取り出す。

【緑璃】

「うんうん、いい感じだね」

【藍叉】

『似合ってる』

【陽】

「ほんとかよ……」

【赤明】

「それじゃ、次は化粧ね」

【陽】

「もう好きにしてくれ……」

【赤明】

「あら、いい覚悟ね」

赤明がポーチから色々な道具を取り出す。

何が何のための道具なんだか、さっぱりわからない。

【赤明】

「はい、目を閉じて」

【陽】

「ああ」

………

【赤明】

「はい、もういいわよ」

目を開く。

当たり前だが、自分の顔がどうなっているのかはわからない。

凄く不安だ。

【陽】

「どんな事になってるんだ？」

【赤明】

「そう言つと思って」

【湖珠】

「鏡持ってきたんだよ」

【藍叉】

『こくん』

縦長い鏡を、夏原と藍叉が運んで来た。

それを、部屋の壁に立てかける。

【緑璃】

「はい、見ていいよ」

にこにこして先輩が促す。

正直、全く見たくない。

【橙歌】

「ほら、早く見なよ」

どん、と鏡の前に押される。

恐る恐る鏡を見ると……

【陽】

「……誰だ？」

鏡の中には、女の子がいた。

体のラインを隠す為の、フリフリのワンピース。

男がそんな物を着ているんだから、不気味な事になると思っていたのに、

化粧や髪型のせいなのか、ボーイッシュな少女のように見える。

言いたくないが、

端的に言って、普通に似合っていた。

【橙歌】

「いやー、びっくりしたよね。まさか、こんなに似合つとは」

【紫苑】

「服を着ただけでもそれなりに似合っていましたからね……」。

でも、ここまでになるなんて……信じられません」

【緑璃】

「陽君、すごく似合ってる。凛々しいお嬢様に見えるよ」

【陽】

「はあ、そうですか」

ほめられているんだろうけど、全然嬉しくない。

【赤明】

「城崎君、あなた、女装の才能があるわよ」

【陽】

「そんなもんいるか！」

【湖珠】

「せっかくだから、写真を撮っておくんだよ」

夏原が携帯を取り出す。

【藍叉】

『私も』

【陽】

「はいはい、勝手に撮ってくれ」

もうやけた。

【藍叉】

『入る』

そっちかよ！

藍又がすぐ側まで体を寄せてくる。

いつもの藍又と夏原くらいの距離だ。

【陽】

「近い近い！」

男女の距離じゃない！

【湖珠】

「……可愛い」

【陽】

「うつとりすんなー！ー！！」

………

写真を撮ったりして、散々騒いだ後、

改めて、テーブルを囲んでいた。

【唯鈴】

「凄いね、お兄さん。どう見ても女の子だよ」

【唯鈴】

「あ、お姉さん、の方がいいのかな？」

【陽】

「どっちでもいいよ……」

こんなはずじゃなかったのに……

どこで間違えてしまったんだろう。

【緑璃】

「うーん、声は男の子だね」

【陽】

「それはどうにもなりませんよ」

【橙歌】

「あれは？ パーティーグッズの音が変わるガス」

【赤明】

「あれは面白い声になるのよ。普通に話していたら、不気味だわ」

【藍叉】

『陽、少し高めの声でしゃべってみて』

【陽】

「ん、ああ」

高め、高め、

【陽】

「あー、あー、こんな感じか？」

【藍叉】

『それは不自然』

【藍叉】

『それに、そんな声で話し続けたら、喉が持たない』

【陽】

「な、なるほど」

【藍叉】

『裏声にしなくていい』

【藍叉】

『もう1回』

唐突に、藍叉の指導が始まってしまった。

【唯鈴】

「藍叉お姉さん、凄いな」

【湖珠】

「アイちゃんは歌い手だから。つまり、声の専門家なんだよ」

あー、そう言えばそうだったな。

.....

【陽】

「始めましてこんにちは。城崎陽あらため陽子です」

【陽】

「これでいいか？」

【藍叉】

『ヤー』

【藍叉】

『ばっちり』

【陽】

「……嬉しくないなあ」

藍叉の指導でやっと合格が貰えた。

かなり自然に、普段より高めの、

女性の声だとすると、ハスキーな感じの声を出せるようになった。

【赤明】

「ご苦労様」

【赤明】

「ますます凛々しくなったわよ」

【紫苑】

「男声ではミスマッチでしたけど、今の声だと、それほど違和感は無いですね」

【緑璃】

「陽君、男役の人みたいだよ。ばっちりカッコイイ感じの女の子になってるね」

【橙歌】

「それで学校行ったら？ 『お姉様ー』とか言われるようになるかもよ」

【陽】

「怖い事言わないでくれ……」

【唯鈴】

「お姉様——」

【赤明】

「あら、既に1人いたわね。私も呼んでみようかしら」

【陽】

「だから止めてくれっての」

【緑璃】

「ふふ。でも、これで黄牙君とのデートはばっちりだね」

【陽】

「でーと？」

【緑璃】

「忘れちゃったの？ 黄牙君に色仕掛けをするんだよね？」

【陽】

「あ—————!!」

そうだった。

女装させられたインパクトで忘れてたけど、

そもそもそういう目的なんだった！

【緑璃】

「大丈夫だよ。今の陽君なら、黄牙君もいちころだよ」

【橙歌】

「びつくりするぐらい美人になったもんね」

【藍叉】

『下着も変えた方が良かった？』

【唯鈴】

「し、下着まで見られるの！？」

【赤明】

「風見さん、不穏当な事を言わないで」

【紫苑】

「……先輩、頑張って下さいね」

気の毒そうに、紫苑が言った。

【陽】

「い……嫌だあああ！」

< P A S T V I E W >

< 大陣家 黄牙私室 >

嶺明の入試まで、残り1週間を切った。

俺も黄牙も、最後の追い込みに入っている。

今日も黄牙の家に来ていたのだが、黄牙はまだ帰っていないらしく、唯鈴ちゃんが相手をしてくれている。

【唯鈴】

「お兄さん、お兄ちゃん合格できそう?」

【陽】

「ん……どうだろう」

黄牙は予想以上に頑張ってくれて、

できる限りの事はしたと、胸を張って言える。

けれど、やっぱり最初の出遅れが足を引っ張っている。

【陽】

「3回に1回は受かるかな」

【唯鈴】

「えー。それだけしか受からないの?」

【陽】

「得意分野からたくさん出てたら受かる点を取るんだけどね。振れ幅が大きいんだよ」

【唯鈴】

「そうなんだ」

【陽】

「まあ、実力は結構ついたから、嶺明じゃなくても、普通の学校には入れると思うよ」

少なくとも、通ってるだけで不良扱いされるような学校よりはレベルの高い所を十分狙える。

【唯鈴】

「でも、私はお兄さん達が同じ学校に言ってくれた方がいいな」

【陽】

「それなら、黄牙に言ってやるといいよ。やる気がさらに上がるだろうから」

【唯鈴】

「うん、そうするね」

そんな話をしていると、玄関の方から黄牙の声が聞こえた。

【黄牙】

「ただいま」

【唯鈴】

「あ、帰って来た！」

【唯鈴】

「お兄ちゃん、お帰りー」

唯鈴ちゃんが、部屋を出て、黄牙の所に向かう。

同じ学校に行って欲しい、か。

そう言われたら、頑張らないといけないな。

俺自身も受からないといけないんだし。

ラスト1週間、気合入れていくとするか。

< P A S T V I E W E N D >

六月二十一日

アルカンシエル

Arc-en-ciel} なのいろのきざはし

大陣黄牙&唯鈴編

< 6月21日(日) >

< 学生寮 213号室 >

アルカンシエル的女子メンバーが暴走した大騒ぎから一夜が明けた。

俺の部屋には朝から唯鈴ちゃんが訪れていた。

【唯鈴】

「お兄さん、おはよう」

【陽】

「ん、おはよう、唯鈴ちゃん。昨日はよく眠れた？」

唯鈴ちゃんは黄牙の部屋に泊まるつもりだったみたいだけど、

唯鈴ちゃんの事を気に入ったらしい緑璃先輩に連れて行かれていた。

【唯鈴】

「うーん……」

と、微妙な表情の唯鈴ちゃん。

【唯鈴】

「よく眠れたけど、朝は息苦しくて目が覚めたよ」

【陽】

「何で？」

【唯鈴】

「寝てる間に、緑璃お姉さんに抱きしめられてたの。
あの大きさは反則だと思うな……」

【陽】

「はは……」

緑璃先輩の胸に埋まってる唯鈴ちゃんの姿が目には浮かぶ。

『そうだね、大きいね』等と言うわけにもいかず、俺は曖昧に笑
うしかなかった。

【唯鈴】

「ところでお兄さん、まだ準備してないの？」

【陽】

「準備？」

何の準備だ？

【唯鈴】

「あれだよ、あれ」

唯鈴ちゃんが壁を指差す。

そこには、ハンガーにかかった昨日のワンピースが。

黄牙と女装デートさせられそうになったわけだけど、

【陽】

「え、あれ本気だったのか？」

【唯鈴】

「もちろん。もうお兄ちゃんと呼び出してるよ」

【陽】

「うえ!？」

何でそんなに手際がいいんだ。

しかも勝手に……

【唯鈴】

「はい、着替えてね」

唯鈴ちゃんがハンガーを外して、俺に服を押し付ける。

【陽】

「どうしても着ないとダメか？」

【唯鈴】

「ダメだよ。せっかくみんなが考えてくれたんだから」

あれは考えてくれたと言うか、悪ノリしただけだと思っただけだなあ。

【陽】

「仕方ないか……」

俺は唯鈴ちゃんからワンピースを受け取った。

<学生寮 玄関>

渋々準備を終えて、寮を出た。

門の所に黄牙の後姿を見つける。

どんな顔して会えばいいんだろう。

と言うか、できれば会いたくない。

あ、そうだ。

このまま別人で通してしまうのはどうだろう。

【黄牙】

「ん？」

黄牙が気づいて振り返る。

その瞳が俺を捉え、

そのまま前に向き直った。

おお、気づけなかった。

これなら何とか……

【黄牙】

「んん？」

黄牙が再び振り返る。

【黄牙】

「んんん？」

不思議そうな顔で俺をじろじろ見る。

何か気になっているが何が気になっているのかわからないという
感じで首を捻った。

【陽】

「……………」

【黄牙】

「……………」

奇妙な見つめ合いが、何十秒が続く。

そして、唐突に黄牙が目を見開いた。

【黄牙】

「おま、お前……陽か!？」

うわ、即効ばれた!

誤魔化すのは無理か。

【陽】

「ん、まあ……」

仕方なく頷く。

【黄牙】

「お、驚いたぜ。つか、誰だてめえは」

【陽】

「だから俺だつて」

【黄牙】

「わかってるけどよ……」

【黄牙】

「何でお前そんな格好してんだよ」

【陽】

「色々あつたんだよ……」

【黄牙】

「て事は、唯鈴が言ってた俺に会わせたい人ってのはお前でいいのか？」

【陽】

「ん、多分な」

唯鈴ちゃん、そんな風に黄牙を呼び出していたのか。

【陽】

「それにしても、よく気づいたな。結構ばれない自信があったんだけど」

自分でもびっくりするぐらい別人なのに、見破られるとは。

【黄牙】

「そりゃな。少々格好が違うぐらいで、俺がお前を見間違っわけねえだろ」

【陽】

「ん、そうか」

少々どころじゃなく違うと思うんだが、

髪型を変えた唯鈴ちゃんを見ても唯鈴ちゃんだってわかったようなものか。

【黄牙】

「で、これからどうすんだ？」

【陽】

「どうするって言われてもなあ……」

黄牙とデートして来いって言われてるんだけど。

【陽】

「正直帰りたい」

【黄牙】

「そうだな。お前がその格好じゃ、俺も落ちつかねえよ」

黄牙が寮の方を向く。

【黄牙】

「あ」

【陽】

「ん？」

【黄牙】

「お前、唯鈴に何かしろって言われてんのか？」

【陽】

「ん、言われてるけど」

【黄牙】

「やっぱりか」

【陽】

「何がやっぱりなんだ？」

【黄牙】

「あそこ、見てみるよ」

黄牙の示した方を見ている。

寮の入り口の影になっている部分から、見覚えのある髪の毛がちらちら見えていた。

【陽】

「あれ、唯鈴ちゃんだよな？」

【黄牙】

「俺達をつけて来たみてえだな」

【陽】

「見張られてるのか。仕方ないなあ」

【黄牙】

「どうすんだ？」

【陽】

「このまま行くしかないだろ」

【黄牙】

「マジかよ」

【陽】

「唯鈴ちゃんのためだ」

【黄牙】

「そついう事ならしかたねえな」

あつさり頷く。

【陽】

「唯鈴ちゃんの名前が出るとこれだからな。このシスコンめ」

【黄牙】

「だから妹思いだつてんだろ！」

【陽】

「はいはい、そうだったな」

【陽】

「それじゃ、行きますか」

【黄牙】

「おう」

<ANOTHER VIEW>

<学生寮 玄関>

やっと出発したみたい。

お兄さん、あの格好で出かけるの嫌がってたけど、ちゃんと行ってくれた。

これで一安心だね。

でも、

【唯鈴】

「いいなあ、お兄ちゃん」

私もお兄さんとデートしたいのに……

今のお兄さんなら、女の子同士だから、いつもよりくつつけるチャンスだったのに。

もう1回、女装してデートしてくれないかな。

無理かなあ。

ずるいよ、お兄ちゃんは。

私なんて、たまーに商店街でちょっと会っただけで、お兄さんとデートなんてした事無いのに。

アルカンシエルの人達もお兄さんと仲良く出かけてたりするのかな。

【唯鈴】

「羨ましいよー」

でも、1番一緒に出かけてるのは多分お兄ちゃんだよね。

2人でいつも何してるんだろ？

うーん……

あ、いい事思いついた！

こっそりついて行ってみようっと。

そうと決まったら、さっそく追いかけなきゃ。

<道路>

前を歩いているお兄ちゃんとお兄さんを見つけた。

やっぱり商店街に行ってるのかな？

この辺りって、他に遊びに行く場所が無いし。

電車で30分くらい行ったらもうちょっと大きい町があるんだけど。

お兄さんと行ってみたいなあ。

【陽】

「なあ、黄牙——」

【黄牙】

「そつだな——」

あ、離されてる。

ちゃんについて行かないと。

【陽】

「今日は――」

【黄牙】

「何だって？ もうちょっと大きい声で話せよ」

【陽】

「この格好で大声出したく無いんだよ」

うわ、ダメだよお兄さん『この格好』とか言ったら。

お兄さんだつてばれちゃうよ。

『ちゃんと女の子の声も練習したんだから、大丈夫だよ』 って言
つてあげたい。

【黄牙】

「んなに気にすんなよ」

【陽】

「そつは言っても……」

【黄牙】

「じゃあねえな。ほら」

【陽】

「おっと」

お、お兄ちゃんがお兄さんの腕を掴んでぐいって。

近い、近いよ！ 距離が近いよ！

もう肩がくつついてるよ！

【黄牙】

「これで聞こえるな」

【陽】

「なるほど。いい考えだな」

【唯鈴】

「ちつともよくないよ！」

【陽】

「ん？」

こっち向いた！

【陽】

「気のせいかな」

【唯鈴】

「ほっ……」

よかった。ばれなかったみたい。

【黄牙】

「何してんだ？」

【陽】

「ん、何でもない。行こう」

<商店街>

お兄ちゃん達はやっぱり商店街に来たみたい。

【陽】

「どうする？ またゲーセンか？」

【黄牙】

「その前に飯食っていいか？」

【陽】

「まだ11時だぞ。早くないか？」

【黄牙】

「俺、朝飯食ってねえんだ」

【陽】

「んー、なら仕方ないか」

【黄牙】

「おっしや。行こうぜ」

【陽】

「はいはい」

お兄ちゃん達は商店街にあるファーストフード店に入って行った。

カウンターで注文をして、トレイを受け取る。

そして、店内のテーブルに運んでいく。

【陽】

「うわっ」

スカートに足を取られて、お兄さんが倒れそうになる。

【唯鈴】

「危な——」

【黄牙】

「危ねえっ」

倒れそうになったお兄さんを、お兄ちゃんが支える。

でも、でも、そんな風に助けなくてもいいのに——！！

何で抱き止めるの！？

【黄牙】

「大丈夫か？」

【陽】

「あ、ああ、サンキユ」

お兄さんーっ！

赤くなってるのは恥ずかしかったからだよね！？

【客A】

「ねえ、あの彼氏かつこよくない？」

【客B】

「私もあんな風に抱きしめられたーい」

やっぱりカップルに見えてるんだ。

それが目的でいいはずなんだけど……

うーん、何だか複雑。

……

……

……

食事の後、お兄ちゃん達はゲームセンターに行っていた。

もう、昨日も行ってたのに。

あ、お兄さん（女装）は昨日行ってないんだっただけ。

お兄さんは、お兄ちゃんがゲームをしているのを後ろで見ていたり、

【陽】

「そこだ、行け！」

【黄牙】

「よっしゃ、もらった……って、ああっ！」

お兄ちゃんのキャラクターが空中でばこばこにされていた。

あ、何か凄い光る技食らってる。

【陽】

「うわ、ひどいコンボが……」

【黄牙】

「これ詐欺だろー」

【陽】

「格ゲーのラスボスってやたら強いよなあ」

……

お兄ちゃんがクレイニングゲームをしている横で苦笑してたり。

【黄牙】

「おっしゃ取れた！」

【陽】

「……それ、他の店で300円で売ってるの見た事あるけどな」

【黄牙】

「3000円也使っちゃった……。ま、いつか」

【陽】

「よくないだろ……」

お兄ちゃん、無駄遣いしすぎだよ……

……

今は、お兄ちゃんと一緒にゲーム（銃で撃つやつ）をしていた。

【ギャラリーA】

「あのカップル凄えなノーマスでラストステージだ」

【ギャラリーB】

「俺もあんな彼女が欲しいなあ」

【ギャラリーC】

「俺の彼女、ゲーセンには来てくれねーんだよな」

へえ、お兄ちゃん達凄いいんだ。

それにしても、お兄さんすっかり女の子扱いされてるなあ。

【ギャラリーA】

「お、ラスボスだぜ」

【黄牙】

「前はこいつに負けちゃったからな。今日は勝つ！」

【陽】

「ま、頑張りますか」

画面の奥から襲って来る巨大なロボットを、撃つ、撃つ、撃つ！

【黄牙】

「ミサイルが！」

【陽】

「任せとけ」

【ギャラリィ】

「おおー」

【陽】

「右腕頼む！」

【黄牙】

「おうよ！」

【ギャラリィ】

「おおー」

【黄牙】

「ビームが！」

【陽】

「それは無理！」

【ギャラリー】

「ああー」

【黄牙】

「これでラストだぜ！」

【陽】

「まだだ、右！」

【黄牙】

「っ、おう！」

お兄ちゃんが画面に向けて引き金を引く。

ロボットが爆発して、『CLEAR』の文字が浮かぶ。

【ギャラリー】

「おおおおー！！！」

お兄さんが銃を機械に戻して、周りをきょろきょろと見回す。

【陽】

「うわ、いつの間にか凄いギャラリーが」

【黄牙】

「見世物じゃねえぞ」

【陽】

「いやー、ある意味見世物なんじゃ……」

【黄牙】

「うるせえよ。さっさと行こうぜ」

【陽】

「ん、わかったよ」

お兄ちゃんとお兄さんは連れ立ってゲームセンターを出て行った。

その姿はどう見ても、彼女を庇う彼氏さんだった。

【唯鈴】

「はっ。まさかつ」

お兄ちゃんはお兄さんと不思議なくらい気が合っつて言ってた。

もしかして、お兄さん（女装）って……お兄ちゃんの理想の相手
！？

それで、お兄ちゃんが本気になっちゃったりしたら……

【唯鈴】

「それはだめえええええつ」

< ANOTHER VIEW END >

クリアしてしまったせいで、注目を浴びているのに気がついて、

ゲーセンを出た。

【陽】

「クリアできるとは思わなかったなあ」

【黄牙】

「……………」

黄牙に話しかけたのに、返事が無い。

何ぼーっとしてるんだろ。

【陽】

「黄牙ー。黄牙さーん。聞いてますかー？」

目の前で手をひらひらと振ると、はっと気がついて瞬きした。

【黄牙】

「っと、何だ、どうした？」

【陽】

「どうしたって言いたいのはこっちだよ。何をぼんやりしてるんだ」

【黄牙】

「いや、今日は趣味探しはしねえのかと思ってな」

【陽】

「ああ、そう言えば」

今日はそれどころじゃなかったんだ。

でも、せっかく外に出て来たんだから、趣味探しをしておくか。

……女装つてのが気になるけど、我慢するか。

午前中はばれなかったしな。

【陽】

「それじゃ」

【唯鈴】

「それはだめええええええつ」

【黄牙】

「おわっ」

【陽】

「な、なんだあ？」

唯鈴ちゃんが凄い勢いで走って来た。

何でゲーセンから出てきたんだろう。

まさか、つけて来てたんだろうか。

【黄牙】

「どうした、唯鈴？」

【唯鈴】

「あのね、お兄ちゃん、言いたい事があるの」

真剣な面持ちで唯鈴ちゃんが口を開く。

何か問題があったのか？

【唯鈴】

「実は……その、お姉さんは、お兄さんなの！」

【黄牙】

「はあ？」

【唯鈴】

「だから、その人は、変装したお兄さんなの」

【黄牙】

「陽なんだろ？ 知ってるぜ」

【唯鈴】

「信じられないかも……って知ってるの！？」

唯鈴ちゃんが驚愕の声を上げる。

【黄牙】

「ああ、知ってる」

【唯鈴】

「お兄さん、ばれてるの？」

【陽】

「ん、まあ」

【唯鈴】

「何で？ 何ではれてるの？」

【陽】

「いや、ばらすなって言われてないし」

【黄牙】

「見りゃわかるしな」

確かに。一目で気づかれたな。

【唯鈴】

「そんなぁ……」

がつくりと頂垂れる。

【黄牙】

「何だよ。何か悪いのか！？」

【唯鈴】

「悪いよ！ お姉さんの正体がばれない為に一緒に行かなかったのに」

【唯鈴】

「ばれてたのなら私も一緒にお出かけしたかったのに……」

ぶくつと頬を膨らませる。

【唯鈴】

「ねえ、お兄さん。またそのお姉さんの格好でお出かけしてくれる？」

【陽】

「それは遠慮したいなあ……」

【唯鈴】

「やっぱり……」

再びがつくりする。

【陽】

「そう言われても、こればかりはなあ」

【黄牙】

「だったら、これから遊んでくりやいいだろ」

【唯鈴】

「え、いいの？」

【黄牙】

「構わねえよ。お前もいいよな」

【陽】

「ああ」

【唯鈴】

「やったあ」

【陽】

「それじゃ、行こうか」

【黄牙】

「じゃ、俺は寮に帰ってるぜ」

【陽】

「ん、来ないのか？」

【黄牙】

「行かねえよ」

【黄牙】

「そんじゃな、唯鈴。楽しんでこいよ」

黄牙が手を振って去って行く。

【唯鈴】

「お兄ちゃん、ありがとうー」

黄牙の後姿を唯鈴ちゃんが手を振って見送った。

【陽】

「それじゃ、行こうか」

【唯鈴】

「うん、お姉さんっ」

【陽】

「お姉さんって……」

【唯鈴】

「あ、ダメだった?」

【陽】

「んー……」

全く呼ばれたくないんだが、

この格好でお兄さんって呼ばれるのは、それはそれで困るのか……

【陽】

「仕方ないか。お姉さんで頼む」

【唯鈴】

「わかったよ」

【陽】

「それじゃ、改めて、出発するか」

【唯鈴】

「うんっ」

【陽】

「どこか行きたい所はあるか?」

そう聞くと、唯鈴ちゃんは少し考えるそぶりを見せる。

【唯鈴】

「えーと……あ、そうだ」

【唯鈴】

「あのね、ケーキの美味しいお店があるんだよ。そこでいい？」

【陽】

「ああ、いいよ。俺は行った事ないから、案内してくれ」

【唯鈴】

「うん。こっちだよ」

.....

【唯鈴】

「ここだよ」

【陽】

「へえ。こんな店があったのか」

唯鈴ちゃんにつれて来られたのは、喫茶店のような店だった。

こじんまりした感じの店で、店先はオープンスペースになっている。
る。

何と言つか、この商店街に似合わない小洒落た感じの店だ。

【唯鈴】

「このお店、去年からあるよ？」

【陽】

「あ、そうなのか。こんな店には来ないからな」

そう考えると商店街の店って1割も使ってないな。

【唯鈴】

「くすつ。お兄ちゃんと同じ事言ってるよ」

【陽】

「だろうなあ」

『ケーキの美味しいお店』と黄牙の組み合わせは、どうも想像がつかない。

【唯鈴】

「じゃあ、入る」

【陽】

「ん、そうだな」

扉を開いて、店内に入る。

店の外見を裏切らない内装に出迎えられた。

うわ、女の子ばかり。

それが、店に入った第一印象だった。

店内の客は年代の上下はあっても、女性オンリーだった。

【陽】

「俺、場違いじゃないか？」

唯鈴ちゃんに聞いてみると、溜息を返された。

【唯鈴】

「何言ってるの、『お姉さん』」

【陽】

「あ、そうか」

今は俺も女なんだった……

これ、ばれたら死ぬんじゃないだろうか。主に社会的に。

……

【唯鈴】

「このケーキ美味しー」

内心びくびくしている俺の気も知らずに、唯鈴ちゃんのご機嫌でケーキをつっている。

食べているのはイチゴのタルト。

ゼリーで固められたイチゴの赤が目には鮮やかだ。

【唯鈴】

「お姉さん？ 食べないの？」

フォークを操る手を止めて、首をかしげる。

【陽】

「え？ いや、食べるよ」

唯鈴ちゃんおすすめのザッハトルテを口に運ぶ。

濃厚なチョコレートの味が口いっぱいに広がった。

【陽】

「お、美味しいな」

【唯鈴】

「でしょ？」

唯鈴ちゃんが嬉しそうに笑う。

【女の子】

「あれ、唯鈴？」

1人の女の子が、唯鈴ちゃんに声をかけて来た。

日曜日なのに、唯鈴ちゃんと同じ中学の制服を着ている。

【唯鈴】

「今日も部活？」

【女の子】

「そうなのー。もう疲れちゃった」

【唯鈴】

「疲れると甘い物が欲しくなるよね」

【女の子】

「そうそう」

わいわいと盛り上がる。

俺や黄牙と話すのとは少し違っていて、新鮮だ。

【陽】

「友達？」

【唯鈴】

「うん、クラスメイト」

【女の子】

「わ、かっこいい人。誰々？　どういう関係？」

【唯鈴】

「えーと、お姉さんのの」

全然説明になっていない。

【女の子】

「へー、お姉さんもいたんだ」

信じてると言うか、勘違いされてるし。

わざわざ説明するのも面倒だから、それでいいか。

【女の子】

「いっつもお兄さんの話しかないから知らなかったな」

【陽】

「お兄さんの話？」

【女子】

「はい。よく自慢してるんですよ。」

寮に入ってるお兄さんが実家に帰ってきた次の日は特に」

【唯鈴】

「もうっ、変な事言わないでよ」

【女子】

「あははっ、ごめんねー。それじゃ、私はもう行くね。ばいばーい」

手を振りながら、店を出て行った。

【陽】

「お兄ちゃんの話してるんだ？」

【唯鈴】

「そんなにしてるつもりはないんだけど……」

【陽】

「自覚がないだけかもな」

【唯鈴】

「ええー。どうしよう、恥ずかしいよ」

赤くなっ た顔を両手で押さえて身もだえする。

【陽】

「ん、いいんじゃないか。前は黄牙の話なんて出来なかったんだから」

以前の黄牙は悪い意味で有名だったせいで、

唯鈴ちゃんが黄牙の話をして、怖がられたり避けられたりするだけだった。

それが、唯鈴ちゃんをからかうネタになっているんだから、いい事だと思う。

【唯鈴】

「あ、そっか。そうだよな」

【唯鈴】

「忘れてた。お兄ちゃんの事を話せるのが嬉しいって事」

唯鈴ちゃんは、真剣な瞳で俺を見つめる。

【唯鈴】

「お兄さん。お兄ちゃんの事、よろしくお願いします」

テーブルに頭がくっつきそうなほど、深く頭を下げる。

【陽】

「ああ。任せとけ」

手を伸ばして、唯鈴ちゃんの頭を撫でる。

【陽】

「黄牙を戻らせたりしない。絶対に」

そう断言すると、唯鈴ちゃんは顔を上げて、にっこりと笑った。

【唯鈴】

「お兄さん、ありがとう」

この笑顔を曇らせないためにも、頑張らないとな。

< 学生寮 213号室 >

【陽】

「あー疲れた……」

部屋に帰って、ようやく着替える事ができた。

男物の服って落ち着くなあ。

普通である事のありがたみを学んでしまった。

【陽】

「この服どうしよう」

ベッドの上に置いたワンピースを見る。

洗濯して返すべきかな。

でも、普通に洗濯したのでいいのか？

んー、わからない。

【陽】

「後で誰かに聞くか」

今日はもう何もする気がしない。

精神的に疲れ切っている。

女装して町を歩くとこんなに神経使うとは……

少し早いけど、今日はもう寝てしまおう。

扉が叩かれた。

誰か来たな。

【陽】

「はい？」

【黄牙】

「俺だ」

黄牙か。何の用だろう。

【陽】

「今行く」

扉を開ける。

【陽】

「どうした？」

【黄牙】

「今日は趣味探しはしねえのかと思ってな」

【陽】

「ん、趣味探しか……」

そう言えば、昼間もできなかったんだった。

でも、今日はもう気力が無いんだよなあ。

【陽】

「悪い、今日は休みにしよう」

【黄牙】

「……そうか。わかった」

残念そうに呟く。

【黄牙】

「じゃあな」

【陽】

「ん、お休み」

黄牙は重い足取りで部屋に帰って行った。

そんなに趣味探しがしたかったのか？

<ANOTHER VIEW>

<学生寮 214号室>

陽と別れて部屋へと戻って来た。

ろくに使っていない勉強机に近づいて、机の引き出しを開ける。

ぐしゃぐしゃに物が詰め込まれた引き出しの置くから、1つの封筒を取り出す

封筒の口を開き、机の上で逆さにすると、一枚の紙が落ちてきた。

その紙を拾い上げる。

これは、嶺明学園の合格通知だ。

こいつを手に入れるのはほんとに大変だったぜ。

勉強が大変だったのはもちろんだけど、

1番大変だったのは受験の日だった。

……あの日も、陽に助けられたんだっとな。

< P A S T V I E W >
< 学園 教室 >

嶺明学園の受験当日。

学科試験最後のチャイムが鳴った。

答案が回収されていく。

【黄牙】

「うえー……」

机に突っ伏す。

【陽】

「おいおい、大丈夫か？」

後ろの席から、陽が声をかけて来た。

どつという偶然かわからねえが、俺と陽は受験番号が前後だった。

【陽】

「ではどうだ？」

【黄牙】

「一応最後まででは行っただぜ」

俺の得意な部分から結構出ていた。

運が良かった、受かる希望ってやつが見える気がするぜ。

【陽】

「ちゃんと合ってれば良いんだけどな」

【黄牙】

「う……嫌な事言っんじゃねえよ」

【陽】

「ん、そうだな。もう終わったんだし、受かっていると思うか」

【黄牙】

「ったく……。そう言っお前はどんなんだよ」

【陽】

「お前が受かってたら俺も受かるだろうよ」

【黄牙】

「ちっ、余裕見せやがって」

【陽】

「お前に教えてる間に妙に成績が上がったからな」

【陽】

「ま、後は最後の面接だけだ。頑張ろうぜ」

【黄牙】

「おうよ」

<学園 廊下>

面接試験を受ける教室の前で、順番を待つ。

【陽】

「3、4、5、6……」

【黄牙】

「何してんだ？」

【陽】

「ん、人数数えてるんだ」

【陽】

「この分だと、俺とお前は一緒に面接を受ける事になるな」

【黄牙】

「面接って1人ずつじゃねえのか？」

【陽】

「嶺明は学生3人と教師1人だ。言わなかったか？」

【黄牙】

「聞いたけどよ。1：3って言うから逆だと思ってたぜ」

完璧に勘違いしてたぜ。

【黄牙】

「まあ、人数違ったらどうってものでもねえし、いいだろ」

【陽】

「ん、そうかもしれないけど。待ってる間に一応説明してやるよ」

<学園 教室>

陽から面接の説明をされている間に、俺達の順番が回ってきた。

陽と知らねえ学生と3人で教室に入る。

ここの面接は、1人の教師が3人の学生にそれぞれ質問して答えさせる形らしい。

俺達が椅子に座ると、面接が始まった。

【試験官】

「面接試験を始めます」

【試験官】

「まずは――」

最初に質問されたのは、知らねえ奴だった。

その次が陽。

そして、俺の順番が回って来た。

【試験官】

「次は……君が大陣黄牙君か」

【黄牙】

「ん？」

俺を知ってんのか？

【試験官】

「失礼。それでは試験を始めるよ」

【試験官】

「大陣君、君は不良と言われる人達と付き合いがあった。そうだね？」

【黄牙】

「そうです」

陽の言ってた通りだな。

内申書ではれてるだろうから、それ何か言われる覚悟をしろって言われてたからな。

【試験官】

「以前の成績を見ると、全く勉強していなかったように感じられるが。それで合格できると思ったのかい？」

【黄牙】

「……受験勉強はしました」

【試験官】

「ほう、それはいつから？」

【黄牙】

「9月からだ……です」

おいおいおい、これは面接試験の質問じゃねえだろ。

こんな質問、参考書には載ってなかったぞ。

【試験官】

「9月ねえ。ちょっと短いんじゃないのかい？」

【黄牙】

「っ……」

こいつ。

こいつの目には覚えがある。

不良のレッテルを貼られている時に、嫌って程見た目だ。

俺を見下し、蔑むような視線。

こいつ、最初っから俺を合格させるつもりなんてねえんだな。

ただの気まぐれか、遊びのつもりで受験したと思ってやがるんだ。

ふん、まさかそんな事で足を引っ張られるなんてな。

……これが自業自得って事かよ。

諦めるしかねえか。

【陽】

「待って下さい」

【黄牙】

「陽？」

横から口を挟んだのは、陽だった。

【試験官】

「何だね？」

【陽】

「黄牙は、確かに人に褒められるような事はしていませんでしたし、はつきり言って馬鹿でした」

【黄牙】

「おいおい……」

こいつ、いきなり俺を貶してどうすんだよ。

【陽】

「でも、こいつは本気で受験しよう決めて、真剣に勉強してきたんです」

【陽】

「だからせめて、きちんと試験をしてやってくれませんか」

陽、お前……

【陽】

「お願いします」

陽が深く頭を下げた。

【黄牙】

「あ、お、お願いしますっ」

陽に倣って、俺も頭を下げる。

【試験官】

「……試験を続ける。以後、私語は慎むように」

< P A S T V I E W E N D S >

合格通知を封筒に入れて、机にしまう。

色々な意味で、嶺明に合格できたのは陽がいたからだと思ってる。

あいつがいなかったら、合格なんてできやしなかった。

不可能みてえな事を、あいつは何度も成功させた。

だから、今回だって何とかしてくれると、そう信じてたんだ。

< ANOTHER
VIEW
END >

お知らせ

Arc-en-cielは、章ごとに別作品にしていたのですが、全編揃って一作品にしました。

以降の更新は、<http://ncode.syosetu.com/n5635n/>にて行います。

小説本文が200文字ないとエラーが出るようなので、埋め。

Arc-en-ciel 　　なないろのきざし
大陣黄牙&唯鈴編

<6月21日(日)>

<学生寮　213号室>

アルカンシエル的女子メンバーが暴走した大騒ぎから一夜が明けた。

俺の部屋には朝から唯鈴ちゃんが訪れていた。

【唯鈴】

「お兄さん、おはよう」

【陽】

「ん、おはよう、唯鈴ちゃん。昨日はよく眠れた？」

唯鈴ちゃんは黄牙の部屋に泊まるつもりだったみたいだけど、

唯鈴ちゃんの事を気に入ったらしい緑璃先輩に連れて行かれていた。

【唯鈴】

「うーん……」

と、微妙な表情の唯鈴ちゃん。

【唯鈴】

「よく眠れたけど、朝は息苦しくて目が覚めたよ」

【陽】

「何で？」

【唯鈴】

「寝てる間に、緑璃お姉さんに抱きしめられてたの。
あの大きさは反則だと思うな……」

【陽】

「はは……」

緑璃先輩の胸に埋まつてる唯鈴ちゃんの姿が目には浮かぶ。

『そうだね、大きいね』等と言うわけにもいかず、俺は曖昧に笑うしかなかった。

【唯鈴】

「ところでお兄さん、まだ準備してないの？」

【陽】

「準備？」

何の準備だ？

【唯鈴】

「あれだよ、あれ」

唯鈴ちゃんが壁を指差す。

そこには、ハンガーにかかった昨日のワンピースが。

黄牙と女装デートさせられそうになったわけだけど、

【陽】

「え、あれ本気だったのか？」

【唯鈴】

「もちろん。もうお兄ちゃんと呼び出してよ」

【陽】

「うえ！？」

何でそんなに手際がいいんだ。

しかも勝手に……

【唯鈴】

「はい、着替えてね」

唯鈴ちゃんがハンガーを外して、俺に服を押し付ける。

【陽】

「どうしても着ないとだめか？」

【唯鈴】

「ダメだよ。せっかくみんなが考えてくれたんだから」

あれは考えてくれたと言っか、悪ノリしただけだと思っただけだなあ。

【陽】

「仕方ないか……」

俺は唯鈴ちゃんからワンピースを受け取った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4579n/>

Arc-en-ciel ~ なないろのきざはし ~ （黄牙&唯鈴ルート）

2010年10月14日14時45分発行